

報 特 攻 会
 平成16年5月

第59号

〒105-0001 東京都港区
 虎ノ門3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊戦没者
 慰霊平和祈念協会
 電話 03(3432)1090
 F A X 03(3432)5567

編集人 田中賢一
 発行人 菅原道熙



第三十五回
 陸海軍特攻隊合同慰霊祭
 三月三十日
 於靖国神社

三笠宮崇仁親王殿下の御臨席を得て
 行はれた。

境内の桜は八分咲、「花の都は靖国神社、庭の梢で咲いて逢およ」と逝った神々、君が霊何れの枝に宿るのか。憶いを胸に集った人々、遺族五十八名、会員約二二〇名。昭和十九年レイテ作戦で初めて特攻隊が現出してから六十年になる。特攻烈士の志、今の人は念頭がないが、我々身近にあった者には生涯忘れることはできない。戦没特攻隊員は、後に続く者あるを信すればこそ完備として一命を擲ったのだ。慰霊と言っ

祭文

昭和十九年十月二十五日、フィリピン・ルソン島のマバラカット東飛行場から、関行男大尉以下、五機の敷島隊が、レイテ沖の敵艦船目掛けて体当たり攻撃を敢行、特攻作戦が発動され

を世に宣揚し、失ってしまった国民の姿を取戻すことが慰霊の真髄である。

今年には六十年の節目の年に当ります。特攻烈士の皆様方は、日に日に戦勢不利となっていく時、空に、海に、更には空挺、戦車に到るまで、我が国土と同胞を護る為には他に方策は無いと、敢然として敵陣営に突入散華されました。戦域はフィリピンに始まり、沖縄、本土上空及び周辺、更には南西海域から満州へと拡大致しました。

目次

特攻戦没者慰霊祭	1
会長・理事長交替挨拶	2
航空碑々前祭	3
特攻観音と世田谷観音寺	4
第一御橋隊全記録抜②	8
特攻機の掩護	15
富嶽隊々員の遺書	20
平泉博士の特攻軍神に捧げる歌	24
特攻の嚆矢友永大尉	28
米空母に突入した俊助兄	33
叙勲は特攻隊員のお蔭	33
靖国御祭神について憶うこと	34
ハンガリー日本博物館	35
十五年度事業報告等	36

皆様方の、みずからの身を犠牲にされた壮挙と崇高なお気持ちに対して、生き長らえた私共一同は、本日、三笠宮崇仁親王殿下のご臨席を仰ぎ、こゝ靖国神社に相集い、肅然と襟を正して心からの敬悼と感謝の念を捧げるものであります。生き残った国民は、昭和天皇の詔勅を体して戦後復興に立ち向かい、世界各国が瞠目する経済大国の地位を築き上げました。

然し乍ら、その過程において、経済至上主義の考え方が蔓延して、永年に亘って培われて来た我が国の伝統と文化が軽視され、自由と人権の本意を覆き違えた、自己中心的な考え方と、恣意的言動が目立つ様になりました。その弊害が所謂、パブル崩壊を機に顕在化し人心の荒廃と社会状況の悪化が進む一方であることは、在天の御英霊に対して、誠に申し訳のないことと思

います。然し乍ら、同時に日本人本来の心を取り戻そうとする動きも、歪められた歴史の見直しを軸として、教育基

本法改正へと凝集されつつあります。そして、各々混迷化を深める国際情勢を目の当りにして、我が国が毅然として国際社会を生き抜いて行く為には、憲法改正をせざるを得ないとする考え方が、世の主流となつて来た事は、誠に喜ばしい事であると申せましょう。余命少なくなりつつある私共は、生ある眼り我が国の軌道修正に、又、御英霊の皆様方の崇高な精神を次世代の国民に正しく伝えて行く事に、全力を傾注する事をお誓い申し上げます。どうか、在天の皆様方には、遍く世の中を御照覧賜り、私共の上に御加護を賜ります様に、伏してお願ひ申し上げます。特攻作戦発動六十年の節目の年に当り、一人の感動を覚えつつ、皆様方の御偉業の顕彰と御遺徳を讃える言葉を申し上げます。どうか安らかに眠り下さい。

平成十六年三月三十日

財団法人 特攻隊戦没者慰霊
 平和祈念協会 会長 瀬島 龍三

会長就任の挨拶



山本 卓眞
 十年余勤められ
 た瀬島会長の後を
 継ぎ、当協会の会
 長を勤めることに
 なりました。幸い前会長は名誉会長と
 して今後もご指導を仰ぐ事ができます
 ので、会員の皆様と共に誤りなく協会
 の運営を続けて行きたいと存じます。
 会員の皆様方のご支持とご協力を御願
 います次第です。

昭和19年10月、特別攻撃隊が編成さ
 れ、出撃してから今年で60年になりま
 す。しかし特攻隊に限らず戦死者並び
 に靖国神社に対する戦後の風潮は、極
 めて憂慮すべき状態が長く続きました。
 近年国民の感覚は大きく正常化しつづ
 ありますが、私達は更に慰霊顕彰の努
 力を続け、正常化を加速する務めがあ
 ります。次世代にも参加して貰う為、
 運営にも一層の智慧と努力が必要と思
 われます。若い方々の発想に耳を傾け
 る事も重要でしょう。

三笠宮殿下のご来臨を仰ぐことができ
 たのは、今後の為にも極めて意義深いこ
 とであり、有難いことです。節度を保ち
 ながら広報できれば好ましいと思います。
 特攻隊の中には旧朝鮮や台湾出身の
 方もおられました。既に日本人と変ら
 ずお祀りされていますが、私達は近隣
 からの声に煩われず均しく慰霊顕彰を
 続けたいと思います。

ご遺族、戦友が高齢となられた今日、
 何処に如何に運営を永続するかは協会
 の重要課題です。これまた会員の方々
 の智慧と提案を御願ひし、新任のご接
 拶と致します。

会長退任の挨拶

瀬島 龍三

今年の特攻攻撃が開始されて60年の
 節目の年に当り、三月三十日靖国神社
 で執り行われた、第25回特攻隊合同慰
 霊祭には、三笠宮崇仁親王殿下の御来
 臨を仰いで、厳粛且つ盛大に終始致し
 ました。

之を機に私は、協会発足以来10年余
 務めて参りました会長を、辞任する決
 心を致しました。然し乍ら、理事全員
 の強い要望があつて、名誉会長として
 留ることに致しました。

後任には山本卓眞副会長が就任致し
 ました。引続いて宜敷く御支援を賜り
 ます様にお願ひ申し上げます。

最近益々混乱の度を加える国際情勢
 に敢然として対処して、我が国存在の
 基盤を固める為には、祖国を、美しい
 国土と同胞を敵手から護るべく、敢然
 として一身を擲打られた特攻隊の方々
 の崇高なお気持が、確實に次代へ継承
 されなければなりません。これが協会
 に課せられた使命であります。

全員一致協力してこの目的を達成す
 べく、努力を続けられることを希って
 止みません。

山本新会長の兄上、卓美之命(航士
 56期)は、昭和19年12月7日に勤皇隊
 隊長として、部下9機と共にレイテ島
 オルモック湾の敵艦船に突入、散華さ
 れましたことを、改めてお知らせ顕彰
 申し上げます。

終りに当り、会員の皆様方の御健勝
 を心からお祈り申し上げます。
 (平成16年4月15日)

理事長就任の挨拶

菅原 道熙

昨年秋の臨時役員会で、体調を崩し
 た最上理事長が辞意を表明して受理さ
 れ、後任に凶らずも不肖の私が指名
 されました。身に余る大任であります
 が、多くの会員が傘寿を超えておられ
 る現状を考えると、黙過し得ずお引受
 け致しました。

協会として現在最も大事なことは、如
 何にして多くの若い方々に、当協会に加
 入して頂けるかということでありませ
 ぬ。

既に数年前から、協会はホームペー
 ジを開設していますが、昨年は新たに
 入会のしおりを作成して、靖国神社
 (遊遊館)、知覧特攻平和会館、萬世平
 和祈念館、世田谷山観音寺に配置して、
 更なる入会促進を図っております。

一方旧軍関係者で協会へ未加入の方々
 に入会勧誘することも、併せて開始致
 しました。

低金利時代、基本財産の運用益を期
 待出来ないで、協会が活動を継続し

て行く為には、ある程度の会員数を確
 保することが必須のことです。
 会員各位におかれましては、戦友会、
 同期会等の機を捉えて、未加入の方々
 に入会を薦めて頂きたくお願ひ申し上
 げますと共に、お身近の心ある若い方々
 にも声を掛けて頂きたく存じます。

理事長就任に当って以上のことを御
 報告致します。何卒宜敷く御支援、御
 協力を賜りたく、衷心よりお願ひ申し
 上げます。

理事長退任の挨拶

最上 貞雄

私は、数年来持病を抱えておりまし
 たが、一昨年末膝を痛めて歩行に困難
 を覚える様になりました。理事長の職
 務を完全に果たすことは無理であると
 判断して、昨秋の臨時役員会でその旨
 を申し出て、退任の承諾を頂きました。
 引続いて理事として御奉仕致します。
 後任には、事務局長の菅原道熙が就任
 致しましたので、宜敷く御支援の程お
 願ひ申し上げます。

特攻平和観音奉賛会、特攻隊慰霊顕
 彰会以来、事務局長、理事長として御
 奉仕を続けて来られたのは、偏えに皆様
 方の御協力の賜物でありましたことに、
 心から感謝申し上げます。有難
 うございました。

これからも引続いて、絶大の御支援、
 御協力を協会に賜ります様に、お願ひ
 申し上げます。

「全陸軍航空碑」碑前祭

四月十三日遺族来賓及び航空同人約三〇〇名の参集を得て行はれた。市ヶ谷台上の碑のある地域は見違えるほど整備され、昔の面影は一変した。航空碑奉賛会岩宮会長の擡げた祭文の要点は次の通り。

我が陸軍航空は、明治四十三年徳川好敏・日野熊蔵兩大尉による代々木原頭での初飛行以来大東亜戦争敗戦に至るまでの二十五年の短い歴史でありましたが、御英霊の皆様には護国の一念に燃え幾多の困難を乗り越え、日夜の猛訓練と研究研鑽を積み重ねて陸軍航空を築き上げ、第一次世界大戦を初め満州



事変・支那事変・ノモンハン事件更に大東亜戦争と国運を賭しての戦に勇敢闘闘され世界航空戦史に燦として輝く数々の偉勲を打ち立てられました。

(中略)昭和五十二年市ヶ谷台上にこの碑を建立し毎年桜花爛漫の頃に碑前祭を催行し慰霊顕彰の誠を捧げて参りました。また既に「陸軍航空の鎮魂」三部冊を発行するなど一層の慰霊顕彰に努めて参りましたが、本日ここに航空碑奉賛同人会主催としての最後の碑前祭を迎えることになり正に感無量なるものを覚えます。

第一回碑前祭より二十三年いままや我々会員は日々老齡化し体力氣力共に衰え、その数も急速に減少してまいりました。このような厳しい現実にともない、碑前祭の施行を航空自衛隊幹部OBの会である「つばさ会」に依頼しましたところ、快く引受て下さいました。従つて明年度からの碑前祭はつばさ会の方々の手によつて挙行されることになりました。

我が陸軍航空の栄光と苦闘の歴史、その中で示された御英霊の偉業と偉勲はしっかりと次の世代により顕彰継承されて行くことでありましよう。

そしてそして次世代の方々には必ずや皆様方の御心を受継いで、複雑混沌の度を加えつつある世界情勢の中で、我が国の平和安泰と一層の発展の為に奮闘努力を重ねて下さることを確信して已みません。御英霊の皆様、私共の後に続く心ある次世代の方々の上に更なる御加護とお導きを賜りますよう心からお願い申し上げます。

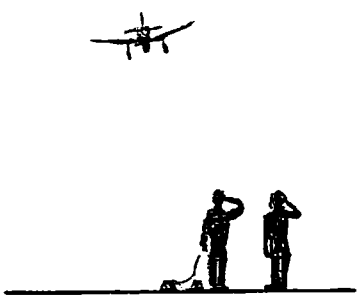
式典終了後市ヶ谷会館に移り総会と懇親会を行った。懇親会乾杯の前に田中理事が次の檄文を読み上げた。

檄

麦風颯々万物躍動の好季 嘗て陸軍航空を背負しこの一堂に会す 霜頭爛額 往年の客氣失せたりと雖も 心中猶一片の耿氣存す
先刻慰霊の儀行ひて 亡き戦友を偲び 在りし日の戦の庭に思ひ走せしなり 碧空に消えし友の笑顔臉に在り 聞き慣れし爆音尚ほ耳朶に存するも 六十年は夢の如く去りぬ

我等戦後生業に勤しみ 祖国に今日の繁栄をもたらせり 然れども儉安久しきに及び 己れあつて国家あるを知らず 權利あつて義務あるを弁へざる徒輩 巷に溢れ 精神の荒廢其の極に達せり
国政の衝に在る者 金権万能の弊風蔓延し 正に金色夜叉の觀あり 経済の繁栄の如き 槿花一朝の夢と化せん 國に殉ぜし我等が戦友 幽界に在りて如何に見給うや 我等類齢に及びしも 世論善導の任 尚双府にあり

速莫茲に玉筵を延べ 老兵相携え杯を傾け 英氣を振弘せんとす 美襟尽くすべし



特攻平和観音と世田谷山観音寺

口真大師（大正大
学教授）と、及川
古志郎（元海軍大將
昭和20年5月28

菅原 道照

はじめに

法隆寺夢殿におわします夢違い観音を
模して鑄造された特攻平和観音像が、世
田谷山観音寺に奉安されて、昭和28年に
特攻平和観音奉賛会を設立した第一世
代の方々、既に悉く亡くなされた。現在
では当時の事情に詳しいのは、先代睦賢
和尚に従って事に当って来られた、現住
職の太田賢照和尚のみになってしまった。
和尚の話を押聴すると初めての事が
多い。そして第三世代ともいうべき我々
も、一番若くして70才台の半ばを越えた。
次世代、次々世代の方々にも、草創期
のことを知って貰う必要があると思われ
るので、改めて18日の月例法要の後に、
3回に亘って賢照師のお話を承った。

この紹介記事によって、特攻平和観
音と世田谷山観音寺とは、見えざる糸
で繋がっていたと思わざるを得ないこ
とが、皆さんお判り頂けることと思う。

一、特攻平和観音

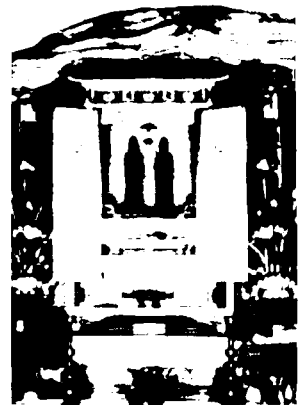
イ、事の始まり

日光山輪王寺華藏院（天台宗）の関

会を象徴する観音像としては、法隆
寺金堂にまします、夢違い観音像が最
も相応しいと考え、当時の法隆寺の佐
伯貫主に願い出て、縮少模写すること
を許された。一〇八体の鑄造を、当時、
神戸高専の古宇田 実教授に依頼し、
希望者に一体5万円で購入することに
なった。

法隆寺の御本尊には光背が付いてい
ないが、平和観音会が鑄造した像には
光背を付けて、戦死者名等を遺族が記
入出来る様に配慮された。因みに現在、
特攻観音堂前の池中に立つ夢違い観音
像には光背はついていない。（下段写
真左）

及川元大將は、熱心な在家の仏教徒
で、関口師と親交があったという。賢
照師が直接関口師から聞いた処による
と、及川元大將に頼まれて、出撃前の
特攻勇士に訓話をされたことがあった
という。



口、音羽・護国寺に安置

平和観音会の活動開始に当り、及川
元大將は河辺正三元陸軍大將（終戦時
航空総軍司令官）と相談し、陸海軍そ
れぞれ2体を譲り受けることにして、
広く関係者から浄財を集め、必要数を
調達することが出来た。

この様にして、昭和27年5月5日に
音羽・護国寺で、東久邇稔彦元宮殿下
の御臨席を仰ぎ、開眼供養が行われた。
かくして初めに完成した2体の観音像
は寺内の忠霊塔に安置された。この時
に使われた厨子は、果鴨の所謂「戦犯
刑務者が製作したものであった。
処が、観音像護持の目的で結成され
た白蓮社が、間もなく財政的に行詰っ
て、観音像は護国寺から立退かざるを
えなくなった。

戦局の奇烈化に伴って、陸軍の第6
航空軍は昭和20年3月20日から、聯合
艦隊司令長官豊田副武大將の指揮下に
入ったので、及川大將は、直接指揮す
る立場ではなかったが、陸海軍航空の
沖繩特攻作戦の最高責任者として、そ
の苦衷を師と仰ぐ関口師に吐露したの
で、訓話が試みられたことがあったの
ではないか、と推察される。

ハ、救い手の出現

及川大將は昭和20年5月29日、軍事
参議官に転じ、後任は豊田大將、最後
の聯合艦隊司令長官には、小澤治三郎
海軍中將が補せられた。

この苦境を知った清水光美元海軍中
將（終戦時予備役）は、睦賢和尚と同
郷且つ一年先輩で、かねて親しい間柄
であった。睦賢和尚は、この時既に世



太田賢睦和尚
(社長時代)

二、特攻平和観音堂の建立
睦賢和尚は、一般参詣者は聖観音に
身体安全、商売繁昌等々のことを祈願
する為に来山するのに、御遺族は戦死
された肉親の冥福を祈る為であって、

この様な経緯で特攻平和観音像は、
本堂の聖観音の傍に遷座され、開眼一
年後の昭和28年5月5日には、2回目
の慰霊法要が日度出度、世田谷山観音
寺で執り行われるに至ったのである。

和向は到々引取りを承諾することになっ
た。
先代は、商人が創建したお寺にこの
様な由緒ある仏像を預かることは、誠
に恐れ多いことと固辞、開山に当って
面倒を見て貰った浅草・金龍山浅草寺
に頼んでみようと思われた。然しながら、
有名寺に次々と断わられ困り切ってい
た関係者は、是非このお寺で、と繰返
し要請された熱意にほだされて、睦賢
和尚は到々引取りを承諾することになっ
た。

田谷山観音寺を開山（昭和26年5月13
日）しておられたので、元中將は和尚
に観音像の引取り方を打診された。
先代は、商人が創建したお寺にこの
様な由緒ある仏像を預かることは、誠
に恐れ多いことと固辞、開山に当って
面倒を見て貰った浅草・金龍山浅草寺
に頼んでみようと思われた。然しながら、
有名寺に次々と断わられ困り切ってい
た関係者は、是非このお寺で、と繰返
し要請された熱意にほだされて、睦賢
和尚は到々引取りを承諾することになっ
た。



特攻観音堂
(世田谷山観音寺内)

世田谷山観音寺鳥瞰写真

正面奥本堂の向って左：特攻平和観音堂
手前道路と楼門を結ぶ参道の左側には現在
は小田原の代官屋敷（昭和14年生田に移築と
されていた）が昭和35年に移築され客殿と
して使われている

祈願目的の違った参詣者が同じ本堂に
相集うことは、好ましいことではない
と早くから感付いて、特攻平和観音堂
を別途建立しなければならぬ、と決
心をされたという。

元の厨子は大き過ぎて持念仏堂に納
知覧町で初めての慰霊法要が行われ

然しながら、睦賢和尚は昭和30年5
月24日に遷化されたが、工事は賢照和
尚が引継いで、昭和31年5月18日に日
出度く落慶法要が営まれる様になり、
18日は月例法要日となって今日まで連
綿として続いている。

陸軍の関係者は、遅れて出来上った
2体の内の1体は、陸軍沖繩特攻作戦
の主要基地であった知覧飛行場跡にお
祀りすることが望ましいと、菅原道大
元中將（終戦時第6航空軍司令官）が、
島浜トメさんに地元への意向を打診した
のであろう。トメさんが観音寺に来て
奉賛会の意向を確認し、町に戻って役
場以下関係方面に根廻しをして、町を
挙げて観音像を引き受けることになっ
た。

先代は、明治維新の神仏分離令で、
華頂宮の手を離れた持念仏堂が人手に
渡り、二人目の人が所有していること
を知って譲り受け、現在地への移築が
始まったのは昭和29年である。

木、知覧への分体
陸軍の關係者は、遅れて出来上った
2体の内の1体は、陸軍沖繩特攻作戦
の主要基地であった知覧飛行場跡にお
祀りすることが望ましいと、菅原道大
元中將（終戦時第6航空軍司令官）が、
島浜トメさんに地元への意向を打診した
のであろう。トメさんが観音寺に来て
奉賛会の意向を確認し、町に戻って役
場以下関係方面に根廻しをして、町を
挙げて観音像を引き受けることになっ
た。

へ、財団法人化
昭和50年代になって、特攻平和観音
奉賛会は、自然解散も止むなし、と考
えられるに至ったが、第二世代の方々
によって、特攻隊慰霊顕彰会に衣替え
をし、竹田恒徳元宮殿下を会長に戴い
て昭和56年に再発足した。
平成4年5月12日に元宮殿下が薨去
されて、瀬島龍三氏が後任会長となり、
平成5年11月に財団法人化が厚生省に
よって認可され、翌年3月28日に千鳥
ヶ淵墓苑で追悼式を挙行、同日午後、
九段会館で設立総会が開かれて、財団

たのは、昭和30年9月28日であること
から、トメさんが上京したのは、早け
れば、昭和28年中であったと思われる。
初めの観音像2体は陸海軍それぞれ
一体宛を世田谷で奉安することにした。
後の2体は世田谷観音寺で関口真大師
の手によって開眼供養が行われ、海軍
は寺岡謙平元海軍中將（終戦時第3航
空艦隊司令長官）の友人、近江、郎氏
（貿易商、終戦直後から全国各地の特
攻隊遺族を慰霊訪問して廻ったとい
う）が、三浦半島観音崎の五島慶太氏の所
有地に祀ることを画策されたが、うま
く事は運ばず、その一体は現在、芝・
増上寺の塔頭、安連院に奉安されてい
る。

たのは、昭和30年9月28日であること
から、トメさんが上京したのは、早け
れば、昭和28年中であったと思われ
る。
初めの観音像2体は陸海軍それぞれ
一体宛を世田谷で奉安することにした。
後の2体は世田谷観音寺で関口真大師
の手によって開眼供養が行われ、海軍
は寺岡謙平元海軍中將（終戦時第3航
空艦隊司令長官）の友人、近江、郎氏
（貿易商、終戦直後から全国各地の特
攻隊遺族を慰霊訪問して廻ったとい
う）が、三浦半島観音崎の五島慶太氏の所
有地に祀ることを画策されたが、うま
く事は運ばず、その一体は現在、芝・
増上寺の塔頭、安連院に奉安されてい
る。

たのは、昭和30年9月28日であること
から、トメさんが上京したのは、早け
れば、昭和28年中であったと思われ
る。
初めの観音像2体は陸海軍それぞれ
一体宛を世田谷で奉安することにした。
後の2体は世田谷観音寺で関口真大師
の手によって開眼供養が行われ、海軍
は寺岡謙平元海軍中將（終戦時第3航
空艦隊司令長官）の友人、近江、郎氏
（貿易商、終戦直後から全国各地の特
攻隊遺族を慰霊訪問して廻ったとい
う）が、三浦半島観音崎の五島慶太氏の所
有地に祀ることを画策されたが、うま
く事は運ばず、その一体は現在、芝・
増上寺の塔頭、安連院に奉安されてい
る。

法人 特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
が発足した。

この辺りの経緯に関しては、会誌特
攻第1号に当時の理事長丸田文雄氏、
第4号に第二世代の中心人物の一人で
あった秋山紋次郎氏、及び第17・18号
には前理事長の最上貞雄氏の、それぞ
れ解説記事が掲載されているので、関
心のある方は参照して戴きたい。

二、世田谷山観音寺

イ、先代睦賢和尚

先代睦賢和尚は、明治22年9月21日
に、長野善光寺近くの造り酒屋の次男
坊として呱呱の声を挙げた。祖父は善
光寺のお坊さんの子息で、養子に入っ
ておられた。

次男坊の身として、青雲の志を抱い
て上京したのは20才前後と思われる。

明治41年に51才で布教の為に来日した
宣教師の、M・H・コンウォール・リー
女史を知ることになる。

リー女史は草津に居を構えて、その
癩（ハンセン氏）病療養所で奉仕活動
を続け、地元から「草津のお母様」と
慕われていた。女史の献身的な行為を
目の当りにした先代は、深い感銘を受
けてキリスト教に帰依する様になり、
女史の手で洗禮を受けて、「ニコラス」
というクリスチャン名を授けられた。

女史の薦めもあったのであろう。更
に深くキリスト教を学ぼうとして、外
遊を思い立ったという。この事を知っ
た先々代は、海外に出ることは思い留
まって、得度することを強く主張し、
翻意した先代は、得度して睦賢を名乗
り、仏教徒としての途を歩むことになっ
た。

先代は商才にも長け、大正12年に世
田谷・三軒茶屋の地で、製菓・製パン
業を興し、近くの野砲兵聯隊の酒保に
製品を納入することに成功、社業は隆
盛してその勢いは、先輩格の銀座木村
屋を凌ぐまでになったという。

褒賞授與之證

松陰饅頭 東京府 太田睦賢

大正十四年三月廿五日
宣教師 M・H・コンウォール・リー
氏より授けられた。

名譽金牌

右審査成績表並ニ之ヲ授與ス
大正十四年三月廿五日
宣教師 M・H・コンウォール・リー
氏より授けられた。

大正14年の全国菓子コンクールで特
賞を得た松陰饅頭の焼印のみを変えた
のが、現在の「特攻饅頭」である。

「静養堂」という店名は、リー女史
と日本初の神学博士今井先生によって
名付けられた。得度後もキリスト教関
係の人々との交流が、variなく続いて
いたことが判る。

更に睦賢和尚は神官の資格も取って、
戦時中は王子稻荷神社の禰宜として奉
仕されたそうである。

先代の頭の中では、これら三つの宗
教が調和共存していたのであろう。実
に稀な能力と性格の持主であったこと
が窺われる。

宗教者は、己の懐が寒くは思っ
とを、思った通りに実践することは出
来ない、という信念を堅持しておられ
たことも偉大というべきであろう。静
養堂で自らの社会的、経済的基盤を確
立することに、先ず全力投球をされた
のであろう。

口、寺院開山

やがてお寺の創建を念願し、先ず土
地探しに取り掛かる。現在地を購入し
たのは昭和12年である。当時は駒沢ゴ
ルフ場の芝生の供給地であった。

土地造成は昭和14年から始まり、造
成業者は、現在特攻観音像が建つ一角

に、階段を付けることを主張したが、
先代はこれを認めず、結果として現在
のお寺の佇まいが保たれたことになっ
た。終戦時には、敷地内に教軒の住宅
が建てられていた。

静養堂は、戦災を免れたので、戦後
いち早く寺院建設に取り掛かることが出
来た。戦前に寺院建築物を建立・蒐集
していた資産家から、現在の本堂、六
角堂（不動明王堂）及び楼門を譲り受
けて、お寺としての体裁を整えること
が出来た。

この様にして、昭和26年5月13日に、
未だ都区乃至所に戦災跡地が残って
いる時、金龍山浅草寺の手で聖観音の
開眼供養が行われ、世田谷山観音寺が
この世に生れ出たのであった。

ハ、特攻平和観音像安住の場

その当時、世田谷は曹洞宗の力が強
く睦賢和尚は土地の有力者から、曹洞
宗派寺院となるべく、鶴見・総持寺の
手によって聖観者の開眼供養を行うこ
とを薦められた。

総本山から細かな事まで拘束を受け
ることを好まなかった先代は、その時
一足早く祈願寺として独立していた浅
草寺に做うことにして、初志を貫徹さ
された。この時既に有力者は、総持寺と
の間で話を進めていたとこのことで、そ

の様な情勢下に屈することの無かった先代の強固な意志力には、敬服せざるを得ない。

開山の前後は、平和観音会による夢違い観音像の縮小模写鑄造は、既に軌道に乗って、及川、河辺両元大将の呼掛けで始まった、観音像4体購入の募金運動も真最中であつたと思われる。

睦賢和尚以下、誰一人として夢想だにしなかつた、特攻平和観音像と世田谷山観音寺が、2年後に結び付く運命の糸は、蒼々として手繰られていたのであつた。

仮に観音像が、護国寺或は他の大寺院に安置されていたら、現在の様にお寺と協会が一体化して、心の澄った年次・月例の法要を営むことは、到底不可能であつたらう。これも、夢違い観音と特攻諸烈士の御霊のお導きによるものであることを、本記事を纏めるに当って、改めて痛切に感じさせられたことである。



(以下编者挿入)

観音菩薩とはどのような仏様か
綜合仏教大辞典には次のように説明してある。

かんのんーぼさつ 観音菩薩

(梵) アヴァローキテーシュヴァラ *Avakitesvara* の訳。阿縛盧枳低湿伐羅などと音写し、藏樓巨とも音略する。

観世音・光世音・観自在・観世自在と訳し、観音・閻音・現音声ともいう。

別名を救世菩薩・施無畏者・蓮華手・普門・大悲聖者と称する。慈悲救済を本願とする菩薩の名。①法華経普門品(観音経)には、現世において衆生の厄難を救い福德を与える菩薩として説かれ、苦悩の衆生が一心にその名を称え

ると即時に音声を観じて解脱を得させるとし、相手に応じて仏身から執金剛身にいたる三十三身を示現して衆生を導くという。華嚴経入法界品では、観音は南海補陀洛 (Potalaka) 山に住し、大悲の法門・光明の行を行じて、衆生の一切の怖れを除くとする。無量寿経や観無量寿経には、西方極楽世界に住し、勢至と共に阿弥陀仏の脇侍としてその教化をたすけるといひ、平等覚経や悲華経では阿弥陀仏の補処とする。密教では胎藏界曼荼羅の諸院に種々な形像の観音を安置する。その中、中台八葉院の西北方に白肉色で右手に開敷

紅蓮華をもつ像を配し、観音院には正観音を部主とした諸尊を安じ、遍知院に准胝、虚空蔵院には念怒鉤・不空鉤・千手千眼、蘇悉地院には一髻羅刹・十

一面を置き、釈迦院・文殊院には釈迦・文殊の脇侍としている。観音を本尊とする観音懺法は追弔・祈禱・報恩のた

めに行われ、また如意輪観音を本尊とする観音求聞持法は智慧を求めめるために修される。②観音を六道に配する説には陀羅尼集経などに見られ、摩訶止観には大悲・大慈・師子無畏・大光普照・天人丈夫・大梵深遠の六観音を順次に地獄から天までに配している。現在、東密では千手千眼・聖・馬頭・十一面・准胝・如意輪の六観音を地獄から天までに配し、台密では准胝の代りに不空羅刹を加えて六観音とする。また准胝と不空羅刹とを並べ数えて七観音という。その他、千光眼観自在菩薩秘密経には八観音・二十五観音・四十観音を数え、諸尊真言句義抄には十五観音(正・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪・不空羅刹・白衣・葉衣・水月・楊柳・阿摩提・多羅・青頸・香王)、阿婆縛抄には二十八観音(聖・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪・不空羅刹・毘俱胝・多羅・白衣・葉衣・忿怒鉤・吉祥・豊財・不空鉤・多称・一髻羅刹・青頸・香王・阿摩提・蓮華頂・

大梵天相・播拏目法・央俱捨・延命・勇健・四面大悲・除八難優)を挙げている。仏像図彙には楊柳・竜頭・持経・円光・遊戯ゆげ・白衣・蓮臥・滝見・施業・魚藍・徳土・水月・一葉・青頸・威徳・延命・衆宝・岩戸・能静・阿釋のく・阿摩提・葉衣・琉璃・多羅尊・蛤蜊・六時・普悲・馬郎・合掌・一如・不二・持蓮・灑水の三十三観音を掲げ

るが、これらの中には中国や日本の民間信仰によるものも含まれている。観音信仰がインドや西域で栄えたことは多くの経軌が作られた事実と、大唐西域記などの文献やエローラ・鹿野苑などの遺跡から知られ、またインド南部の秣羅矩吒国布呬洛迦山は観音の靈跡として著名である。中国では羅什が法華経を伝訳してからその信仰が大いに栄え、造像も盛んで、偽経や驗記も著わされ、浙江省舟山列島の普陀山普濟寺が補陀落山に擬せられた。日本では聖徳太子が救世観音を尊崇して以来その信仰が盛んとなり、主として現世の福業がねがわれたが、浄土教がおこつてからは来迎の菩薩としても敬われた。平安時代には宮中で観音供が行われ、長谷寺・清水寺・石山寺などの観音霊場が上下の信仰をあつめ、のち西国三十三カ所の巡礼が流行し、坂東などに

「第一御楯特別攻撃隊の全記録」抜(続)

第1(第2章は57号(15年11月)に掲載済

第3章 サイパン特別銃撃隊、

硫黄島基地を発進

昭和19年11月27日、実に奇麗な日の出と共に、私にとっては生涯忘れ得ぬ一日の幕が上がった。午前7時過ぎ、零戦が集結待機している第2飛行場に参加搭乗員全員が集合、まず零戦隊員に対する注意事項の伝達か、瀬藤満寿三少佐よりなされる。

その後、零戦隊員は各自の服装に付いている名前の布や等級マークを剥いで大村隊長に渡す。次いで整列したサイパン特別銃撃隊、彩雲隊の18名の搭乗員を前に、3航艦司令長官寺岡運平中将から激励の訓示があった。しかし、このような経験が初めての私は、上がっていたのである。その内容は何も覚えていない。それが終わって、我々は寺岡中将、幕僚等と水盃を交わし、その素焼きの盃を、決意を込めて地上の石に打ち当てて砕く。

その後、100mほど離れた所に設定された場所に移動、記念写真を撮る。居並ぶのは寺岡中将を中心に瀬藤少佐と



作戦参加の搭乗員18名の合計20名である。

この時の記念写真を含め、瀬藤少佐の注意事項伝達から、大村隊長機発進の瞬間までの一連の状況が、当時の報道班員(新聞社のカメラマン)によって、5枚の写真に撮影され、当時を物語る貴重な資料としてこの記録にも掲載した。

零戦隊員はそれぞれの感慨を胸に愛機に散り、いよいよ最後の発進準備に入る。我々6人の彩雲隊員はオート二輪で下の第1飛行場へ移動、発進準備を急ぐ。

8時、硫黄島基地員の「帽振れ」に見送られ、まず彩雲1番機、2番機の順で第1飛行場を離陸する。上空を緩やかに旋回する間に、第2飛行場を発進した零戦隊全機が順調に合同、彩雲1番機の後に零戦12機の編隊が続き、更にその後方を彩雲2番機が随行する隊形を組んだ。空はどこまでも晴れ渡り、進撃を阻む気象条件はなさそうだった。

第4章 苦心した零戦隊誘導と、悲痛な分離

8時10分、14機の編隊は硫黄島上空を通過、一路サイパン島、テニアン島を目指して進撃を開始する。暫く上昇飛行を続け、進撃高度1000mに達する。

この日、全コース快晴に恵まれ、雲は殆どなく、気流も安定し、まさに誘導には絶好の天候だった。

だが、誘導上の最大の難問は、零戦の巡航速度(計器速度)140節(259km)に比べ、彩雲は180節(333km)以上あることだった。これを合わせるのも、本作戦の主役は零戦隊であり、作戦成功の為に、彩雲の燃料消費増加をも厭わず、何としても零戦の巡航速度に合わせて飛ばなければならぬ。



は技術的に一番難しい問題だった。その時、彩雲1番機はその難問を克服し、完璧な誘導を達成したのであるが、その詳しい苦心談は、後述の広瀬飛曹長ご本人の手記に譲る事にする。

計器速度100節(実速は100節)で直線飛行をする彩雲1番機にピッタリつけて飛ぶ零戦隊の、更にその後方を随行する彩雲2番機は、速度低下がうまく出来ないであろう、ゆっくり右に左に飛ぶ蛇行飛行で速度を合わせていた。広瀬飛曹長が成功した速度低下の方法を伝えたいが、進撃中の今は編隊を崩すわけにはゆかず、電波封止のため知らせる事も出来ない。やむをえず、そのまま飛ぶ。

硫黄島を発進後、右前方に見えていた南硫黄島も忽ち後方に移動し、遠くなくなったと思ううちに、やがて水平線に淡く消えるように見えなくなった。これからマリアナ諸島最北端の火山島ウラカスの噴煙を見るまでは、小島一つ、いや、波しぶきを上げる岩礁とてもない洋上飛行、見えるものは空と海、それと遠くに見える水平線上に連なる雲の嶺だけで、航法上の目標は何もない。頼りにするものは、機長南少尉の航法の腕だけである。

零戦12機の編隊はびたりと見事な隊形を組んだまま、彩雲1番機の後を飛

び続けている。

通常の2・3座機の後席が前方を向いて座るようになっていたのと異なり、彩雲の電信席は後方を向いて設けられていた。その電信席に座った私は、2時間半の誘導飛行中、必然的に零戦隊を見守るように見張りを続けた。

その間、開戦後輝かしい戦歴を誇った栄光の零戦に比べ、このような決死的作戦に使われる痛ましい落日の姿。更には、生還を自ら放棄した零戦隊員の崇高な決意に対し、生還しなければ任務を達成できない我々の宿命を思うと、じっと見守る私の心は苛まれた。

それと同時に、この悲壮な彼等の雄姿をこの瞳に焼きつけておき、もしも万が一、自分がこの戦いに生き残る事があったならば、この経緯を遺族に伝えねばならない、という気持ちがある以上には強かった。今でも目を閉じると、増槽を抱き、両翼に20ミリ・13ミリ計4門の銃身をグッと突き出した零戦の雄姿が胸に浮かび、目が潤む。

針路16度で飛ぶこと1時間50分、機長の航法の正確さを証明するかのようになり、左前方予定地点にウラカス島が見えてきた。この島はマリアナ諸島の最北端にある火山島で、常時白い噴煙をたなびかせ、航法の位置確認にはもってこいの目標である。

ここで彩雲2番機は暗号書投下任務の為、軽くバンクしたあと、さっと分離行動に移り、忽ち視界から消えた。

だが、それが彼等3人との永遠の別れとも知らず、私は手を振ることさえしなかった事が今に至るも痛恨の思い出となっている。

ウラカスについて、モウグ、アツソングソンの島々が次々と左前方に見えてくる。列島の島々の上空にはぽっかりと白雲が浮いたように連なっている。10時40分アグリガン島が前方に現れてきた。いよいよ零戦隊分離の時である。

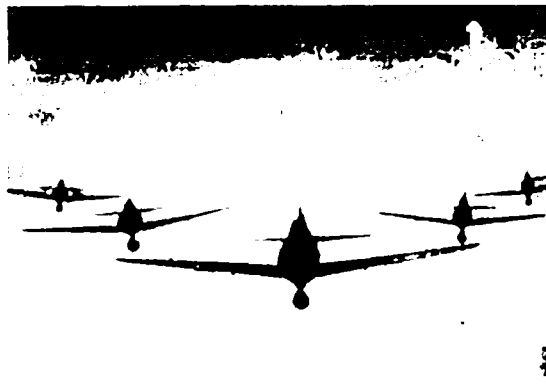
前日の作戦会議で打ち合わせた通り、機長南少尉の指示を受けた広瀬飛曹長は、解散の合図の大きなバンク(主翼を振ること)をする。

大村中尉機がそれに応えて、2・3回小さくバンクすると見る間に、ゆるやかに左に主翼を傾けて降下姿勢に入った。列機が一斉にそれに従う。別離の瞬間である。胸迫る思いで我等3人拳手の礼でこれを見送る。アグリガン島北側の空域に突入するように降下する12機の零戦はみるみるうちに小さくなり、点となり、キラキラ輝く紺碧の海の色に溶け込むように消えていった。

第5章 彩雲1番機テニアン島に接近

先に彩雲2番機と分かれ、今また零戦隊誘導の任務を果たし、ただ一機になった我が彩雲1番機は、マリアナ列島線西方の孤独の空を徐々に上昇しつつ南西に向かう。針路20度「直候」(よーそろ)。

次いでアラマガン島の西方90哩(16哩)の地点で左に変針、針路180度で南下する。その頃高度が500mに達したので、12本の酸素ボンベを総て全開にし、酸素マスクを着用する。上昇するに従い、気温がグングン低下していくのを



肌で感じる。

高度1000m付近でまだ燃料の残っている増槽タンク(瀧リットル入り)を投下する。勿体無いようだが増槽の空気が抵抗が上昇の妨げになるのでやむをえない。

この時は簡単に落ちたが、去る9日のグアム島偵察の時には、広瀬飛曹長が投下操作をいろいろ工夫して繰り返しても増槽が落ちず、遂に機長高木少佐は、下方の偵察窓を開け飛行軌で何度も蹴ったが、それでも落ちない。遂に増槽に穴があいてしまったが、その後ようやく落ちた事を思い出す。

また、その時は、遠くにグアム島を望見する高度1000mの地点まで達しながら、電信席の酸素の配管(細い銅管)にごみが詰まって狭くなっていったが、私だけが酸素不足のため突然失神し、我が機は偵察目的を断念、引き返すという大失態を演じている。

その時は私の記念すべき初陣であり、残念無念やるかたない痛恨の出来事だったので、今回は酸素の流れ具合には特に注意をする。

アナタハン島西方の地点に来た頃、南機長から「これより敵戦闘機の行動圏に入る」と見張りの注意がある。彩雲は終戦まで電探を搭載しなかった。従って見張りは肉眼に頼るはかなかつ

たし、我々電信員には見張りが第一番に重要な任務であった。

そして、武装といえば電信席の7・9mm旋回機銃一挺。それも後方左右上下、夫々極めて狭い射角しかない上に、その狭い射角の中には、垂直・水平尾翼がでんと構えて射撃の邪魔をしている。これでは後方から追尾してくる敵機を撃つのも困難である。実戦で役に立つのだろうかと思う。従って、敵機が見えるか見えない遠距離で敵に先んじて発見し、後は優速を利用して避退する以外に手段はない。

その為であろう、橋本敏男少佐(私が鈴鹿28期飛練で墜落事故を起こした時の分隊長)が指揮した3隊空偵察4飛行隊では、沖繩戦以降彩雲の機銃を外し、速度、航続距離の向上を図ったという。

あの広い大空のどこに、いつ現れるかも知れない小さい点のように見える敵機を求めて、目を皿のようにして探し続けるのは、単純な作業ではあったが、長時間緊張を維持するこの見張りには、単純なだけに辛い根気を要する任務だった。

特に、敵基地からの距離80哩(128km)圏内に入る頃には、我が機はまだ高度800m位を上昇中で、敵は電探で我が機を探知し、遊撃戦闘機を誘導、待ち構

えている公算大で、最も狙われやすく危険であると、広瀬飛曹長から特に注意されていた。

この厳格な見張り上の配慮は、広瀬飛曹長自身が1年前の「ろ」号作戦で、艦偵彗星に搭乗し、ラバウル東方海上の密雲の直下を素敵飛行中、敵グラマ NF6F戦闘機2機に、後下方からの奇襲攻撃を受け、撃墜されるという苦しい体験に基づくものであった。

この時広瀬飛曹長は、炎上しつつ墜落する愛機を洋上に不時着水させ、自傷の体で18時間泳いだ末、通り掛かった輸送船に救助されたという奇跡的な生還を遂げている。

第6章 サイパン島の写真偵察 成功す

テナン島の33度87哩(162km)の地点まで南下した後、左に大きく変針、針路63度でテナン島に直進する。この間も我が機は依然上昇を続け、霧戦

隊の攻撃開始予定時刻から10分後の12時20分にはテナン島南端の上空で高度1000mに達し、同高度等速度直線飛行でテナアン、サイパン両島を縦断する

偵察コースに進入した。この時、南機長は固定航空写真機K8型(焦点距離50cm)の自動スイッチを入れ連続撮影を開始した。見張りをしながら写真機

を垂直に保持する私の手に、11秒置きに作動するシャッターと、フィルム自動巻上機構の動きが感じられる。

島の上空と周辺には雲一つなく、写真偵察には最高の気象条件で、直下のテナアン、サイパンはその全貌を余す所なく見せていた。遠く水平方向を眺めると、大気圏と成層圏の境界が明らかに判別され、さすが1万mの高空だと実感する。

愛機彩雲は広瀬飛曹長の見事な操縦で、ピタリと定針したまま滑るよう飛ぶ。この高々度では空気が極端に希薄な為、爆音も、伝声管の声も全く聞こえなくなる。高度1000mであれば明瞭に聞こえていたブザーの音すら、自分で押して耳を澄ませているのに、全然聞こえないのは驚いた。それだけ空気が希薄な為だというのが、体験して初めて知った現象であった。

上空を仰ぐと、群青だった空の色はいつの間にか薄墨色となり、暗い感じに変わっていた。それに太陽の輝き具合まで変わって、まぶしいというよりガラガラしてきた。

そしていつも気になる愛機の振動までが全く無くなり、一瞬、音のない静寂そのものの別世界か、異次元の不思議な国に迷い込んだような感じがしてくる。

それに周囲に雲のような対象物がな
いので、空中の一点に愛機が停止し、
時の流れさえも止まってしまったかの
ような奇妙な錯覚が生じてきた。思わ
ず、胴体下にある垂直写真撮影用窓の
隙間から直下のテニアン島を見る。風
景がゆっくり後ろへ流れているのを見
て現実に戻り、ホッと一安心。

テニアン島を通過、サイパン島上空
に侵入する。もうそろそろ零戦隊の攻
撃による黒煙が見えそうなものだがと
下を見る。今か今かと待つうちにサイ
パン島北端に達したが、異状は起きな
い。計画ではこのまま帰途につく予定
であったが、敵戦闘機は600m付近を上
昇中で、これなら敵機が彩雲の高度に
達するまでに十分余裕があると判断し
た。広瀬飛曹長は、南機長と打ち合わせ、
再度写真偵察をする為、風に流される
偏流を計算しつつ、しかも高度の低下
を来さぬよう、ゆっくりと180度の旋回
を行い、逆コースを飛ぶ。

12時40分、遂にテニアン島南端に達
したが、その間もサイパン・テニアン
両島に変化は起こらなかった。この二
航過で横24cm・縦18cmサイズのフィル
ム15枚全部を撮り終った。

高々度から見たサイパン島は、北西
地区のサンゴ礁であろうか、黄緑色の
絵具を溶かしたような色鮮やかな海、

濃緑のジャングル、掘り起こされた茶
色の大地で彩られ、飛行場と掩体壕に
見える大小無数の飛行機が無かったら、
風光明媚、平和な楽園そのものである。
僅か数か月前、この両島で、凄惨な
死闘が演じられたとはとても信じられ
なかった。

この1万mの高度では、機内の温度
は零下30度位に低下し、夏の飛行服で
は凍て付くような寒さを防ぎようもな
く、体はこわ張り、手足がジンとし
びれてきて、指の動きもままならない。
サイパン、テニアン上空の往復約20
分間は、攻撃によるB29炎上を示す黒
煙を求めて、苛立ちのうちに過ぎてし
まったが、これ以上高々度飛行を続け
る事は、燃料、酸素、寒気の関係上許
されない。両島の全貌を納めた大事な
フィルムを硫黄島に持ち帰る為には、
残念ながら戦果偵察続行の断念もやむ
を得ない状況となってきた。

機長南少尉は広瀬飛曹長に帰還を命
じる。

零戦隊はどうしたのだろうか、奇襲
は成功したのか、不成功だったのだろ
うか、敵地離脱の時は後ろ髪を引かれ
るような思いで、次第に遠ざかるサイ
パンを見やり、ギリギリの距離まで双
眼鏡を用いたが、やはり攻撃成功を告
げる黒煙は遂に見えなかった。

第7章

バガン島飛行場を観察 後帰途につく

帰路は一旦300度の針路で62哩(115km)
避退してから針路0度で北上、アナタ
ハン島の西方60哩(111km)の地点から、
状況確認の為バガン島へ向かう。同時
に、硫黄島基地へ「偵察終了、我今よ
り帰途につく」の打電をする。降下飛
行なので彩雲の機速は物凄く速い。実
速332節(615km)。テニアン島を離脱後
僅か45分でバガン上空へ来てしまった。
高度100mで飛行場上空を飛ぶ。私は低
空なので上空の見張りに専念、下を見
る余裕はなかったが、南少尉と広瀬飛
曹長は穴だらけの滑走路に不時着して
いる零戦一機を確認。

ここから針路330度で飛行、右にウラ
カス島を見て機位を確認、硫黄島へ向
かう。

この辺まで来ると敵戦闘機による奇
襲の心配はまずない。今まで張りつめ
ていた緊張が薄れてきたのであろう、
つい眠気を催してくる。ハッと気が
つき、慌ててブザーを押す。広瀬飛曹
長は無言。厳しいお小言はなかった。

一瞬の居眠りだったのだろうか、それ
とも承知の上の無言だったのだろうか。
いずれにしても油断大敵、心を引き締
め、以後は見張りの万全を期す。

14時45分、機長南少尉から、伝言管
で「暫くすると左前方に南硫黄島が見
えてくるはずだから、よく見張るよう
に」と知らせがある。従って進行方向
の左側の見張りに重点を置く。しかし、
そう言われても右側も軽視してはなら
ないのが見張りの鉄則。

ところが、それから10分も経っただ
ろうか、なんと右主翼の陰からおむす
びのような形の小さな島が、はるか遠
く、霞がかかったように薄ぼんやり見
えきた。そんな害がない、幻かと目を
瞠ってよくよく見直したが間違いない。
距離は30哩(56km)以上もあるか。

私はすぐ「右正横に島が見えます」と
報告。機長は「エッ」と驚いて右を
見る。状況判断からして南硫黄島と考
えられる。接近してみたが間違いない。
前方を見張っていたベテラン広瀬飛
曹長が最初に発見しなかったのは、視
界ギリギリの位置関係にあり、島が真
横の位置に来て漸く見えた為だった。

この後29、30日の2回、戦果偵察で
マリアナへ飛んだが、その2回共全く
同じ事があった。この大きな航法誤差
について南少尉は、針路330度付近以外
の航法は正確なので、乗機彩雲のコン
パスの自差(飛行機の針路変化により
生じる誤差。曲線グラフで示す)が狂っ
ていたのであろうと言っておられたが、

私もそれ以外に原因は考えられないと思う。

南硫黄島から針路を30度にとる頃、薄い雲を通して右前下方に、同方向へ向かうB24数機の編隊が見えてきた。

目的は硫黄島爆撃に間違いはない。我が機のスピードの方が早く、それを追い越すと、ほどなく前方に硫黄島のシンボル捕鉢山が見えてきた。

ここで我が機が着陸する前に、B24の爆撃で滑走路に被弾すると、着陸が出来なくなる恐れが生じる。一刻も早く着陸を急がなくてはならない。広瀬飛曹長は誘導路を回らずに捕鉢山の横から滑り込むように第1飛行場に着陸した。時に15時17分。

広瀬飛曹長が地上滑走の行き足を早く止めると、3人も飛び降りる。滑走路脇の指揮所のテントは爆風を除ける為に畳んであった。もう敵機は間近に迫ってくる頃だ。我々は滑走路脇の崖を駆け下りて退避する。

その時、ザーという爆弾落下の聞き慣れた音が聞こえてきた。とっさに上空を見やると、爆弾が小さい罌粟粒のように落ちてくる。だが落下のコースがやや右に外れているのが確認できた。一応は安心したが、それでも何となく怖いから窪地を見つけて地上に伏せる。その途端右30m位のところをタッタッ

タツと猛烈な爆発音が連続して走った。間もなく空襲警報が解除となり、南嶺機長はそれを待ちかねるようになした寺岡長官に直接報告を済ませ、この日の任務は終わった。

全コース30km(30km)、帰投時刻15時17分。飛行時間7時間7分であった。

第8章 彩雲2番機遂に帰らず

我が機が硫黄島第1飛行場に帰投した時、彩雲2番機はまだ帰っていなかった。そこで我々は僚機の帰着を飛行場で待つ事にする。南少尉、広瀬飛曹長と3人で、そろそろ見える頃だと、無事な姿を現すであろう南の空を見守る。30分が経ち、——時間が経過する。

——刻々と時を刻む時計の針が気に掛かる。——また時計を見る。——燃料切れの時刻が近づくと、次第に増す不安が心を苛む。

誰もが無言である。やがて、もうこれ以上は燃料が無くなるという頃、西の空は薄い茜色に染まりはじめた。それでも雲の影から2番機が姿を見せないかと佇んでいる。

暫くして「帰ろうか」という南機長の呟きで、重い足を引くようにして宿舎に向かう。その夜の食事が進まなかったのは乾燥野菜のせいだけではなかった。

その晩のように寝つきが悪い夜は、私にとっては初めての体験だった。

2番機はバガン島に暗号書等を投下後、戦果偵察に向かった所までは確認されているが、その後の状況は無線連絡がない為、消息不明のまま終戦を迎えた。

当時、敵基地偵察のセオリーとしては、偵察終了までは全く無線禁止のまま飛び、偵察が終了、帰還コースに入ってから無線連絡をとる建前になっていた。従って2番機は偵察終了前に何らかの異変があったという事になる。

当時の敵情から見て、3航艦司令部としては、この作戦では彩雲2機のうちどちらかが、戦果偵察に成功すれば良いと考えていたらしい。

元来、偵察任務というものは地味なもので、単機行動が原則の偵察機は、未帰還の場合、その状況を誰も確認することなく、華やかな戦闘・戦果の陰にひっそりと消息を絶つ例が殆どであった。ベテラン機でさえもその最後は然り、偵察機の避け得ざる宿命である。

ところが、幸いにして彩雲2番機の情報も秦郁彦氏が調査された米軍記録により、次のように判明している。

零戦隊の銃撃で燃え上がるB29の黒煙をかいくぐるようにして、空襲警報

発令と同時に13時43分(日本時間)に離陸した第19戦闘機中隊のラスティック中尉の操縦するP47は、レーダーに誘導されて高度をあげながら南下した。

そしてテナアン島とサイパン島の中間、高度3000フィート(約900m)を旋回する日本機を発見、後方から迫って40発の13mm弾を撃ち込んだ。風防が吹き飛び墜落していったが、500フィート(約150m)で落下傘が開き、300フィート(約90m)で綱が切れて落ちたのをラスティック中尉は目撃した。

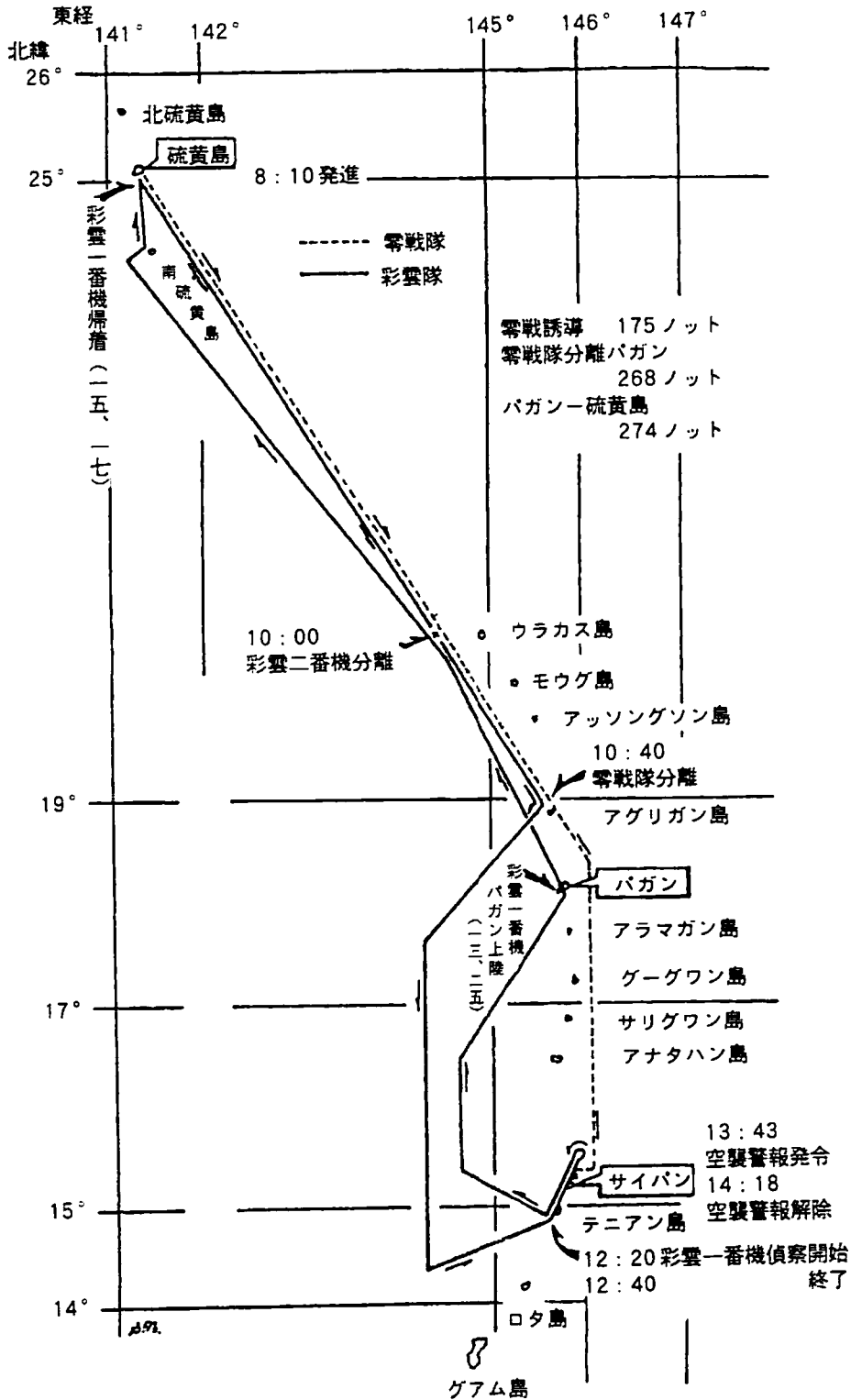
ラスティック中尉は最初機種不明と報告し、後で零戦と訂正したが、その時刻、その高度を飛んだ状況から見て、この日本機は彩雲2番機と断定して間違いないと思う。

——以上——

彩雲2番機の撃墜されるまでの行動は不明であるが、この時刻から推定すると、2番機は1番機より約1時間遅れてサイパン、テナアンの上空に侵入したが、零戦隊の攻撃による地上の黒煙を発見し、写真撮影をしようとして旋回していたものと思われる。

帰途の燃料不足の危険を冒してまで、あくまでも戦果偵察を遂行しようとしたのであろう。そして当初の飛行高度1万m以上か、旋回の際に高度が低下

第一御楯特別攻撃隊及び彩雲隊の行動概図



し、排気タービンを備え、高々度性能に優れたP47の攻撃を許したのではあるまいか。

第9章 サイパン特別銃撃隊の成果

我が機が硫黄島に掃投後知らされた敵情は、次のような事だった。

①硫黄島無線室が傍受していたマリアナの米軍放送は、我が機がテナアン南端を離脱してから1時間後の、13時43分急に慌てた口調で「空襲！、空襲！、サイパン・テナアンに飛来する飛行機はグアム島に普降せよ」と放送、更に、来襲した零戦隊が、近海に接近した日本海軍の空母から発進したものと判断。その為の索敵機を発進させる命令を発していたという。この空襲警報は14時18分に解除されている。

②マリアナ列島線東方を超低空で南下中、零戦一機がプロペラで波頭を叩き、その先端が変形した為に激しい機体の振動が起こり、飛行困難な状況となって攻撃を断念、バガン島に不時着した(松下武男一飛曹機)。

③銃撃を決定した零戦隊のうち一機だけか、バガン島に戻ってきたが、搭乗員は被弾していた為に、着陸時椰子林に突っ込み戦死した(明城哲飛

長と判明)。
翌28日、3種軍装に飛行帽・飛行靴姿の航空参謀三沢少佐が飛行場の片隅で、我々に

「この零戦隊は特攻隊と同じだから、ぜひ戦果を確認してやりたいんだ」と、しみじみと心情を漏らされるように言われた言葉は今も忘れられない。腕を組みながらの会話で、命令調に言われたのではなく、三沢参謀の人間味溢れる人柄からくるものであるう、我々を自然と納得させる説得力を持った話し方だった。

しかし、この日は前から風邪をひいていた広瀬飛曹長が、厳しい酷寒の高々度飛行で病状をこじらせ木更津へ帰還する事となり、この日の戦果偵察は中止と決定、翌29日改めて彩雲1番機が戦果確認の為にアスリート飛行場の写真偵察を決定する事になった。

但し、この時は広瀬飛曹長の代わりに、操縦員だけが神崎十四春上飛曹(乙飛16期)に変更された。神崎上飛曹は彩雲2番機が行方不明となった為、急遽派遣された彩雲3番機の操縦員として、28日に木更津基地から硫黄島基地に飛来したばかりである。広瀬飛曹長は神崎上飛曹に、「1番機の発動機は最高の調子だ。安心して飛べ」と話していた。

第10章 彩雲による戦果偵察不成功に絡わる

11月29日午前8時発進、我が機は再びサイパン島へ飛んだ。この時も機長南少尉の適切な飛行計画のお陰で、敵戦闘機と遭遇する事もなく、サイパン島の上空500mを飛行した。しかし折角成功した高々度飛行も、残念ながらこの時、島の上空は高度6000mまで濃い雲に覆われ、所々にある僅かな雲の切れ目から地上がチラッと見える程度で、写真偵察は勿論、目視偵察も不可能であった。

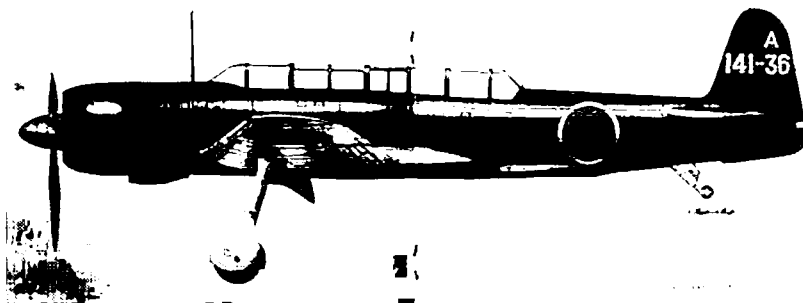
翌30日もサイパン島へ向かう。しかし、マリアナ列島の東を高度を上げつつ南下中、エンジンの調子がおかしくなってきた。それでも何とかして戦果偵察を敢行しようとした南少尉は飛行続行を決意したが、アナタハン島に近づくと、高度6000mで過給器を2速に切り替えてから、エンジンがパン、パンと異常音を立て始め、南機長は遂に偵察続行を断念、神崎上飛曹に帰還を命じる。

かくして彩雲によるサイパン特別銃撃隊の戦果確認は残念ながら不成功に終わった。

但し、その後サイパン島から飛来したB29が撃墜され、捕虜になった米軍

飛行士の尋問で「攻撃隊は極めて低空で来襲し、地上のB29に対し三度繰り返し激しい銃撃を行った」との証言を得ている。

従ってそれ相当の戦果を挙げた事は推察できたが、戦後米軍の記録・資料で確認するまで不明だった。その戦果については後述する。(続)



彩雲 (模型)

特攻機の援護

深川 巖

宮崎県都城市に、陸軍特別攻撃隊疾風の碑がある。毎年4月6日、都城市当局（都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会）主催の下に御遺族・戦友・関係者相集い厳粛な慰霊祭が執り行われる。

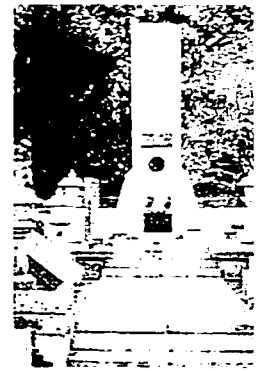
第百飛行団は沖繩作戦の第一次航空総攻撃にあたり、第六航空軍より特命を受け、第一〇一戦隊から六機、第一〇二戦隊から四機計十機からなる自隊からの特攻隊は第一特別振武隊と命名された。第一特別振武隊の林弘少尉以

第一特別振武隊	隊長 林 弘
飛行機	田中 二機
飛行機	佐藤 二機
飛行機	林 五機
飛行機	伊藤 二機
飛行機	石川 一機
飛行機	上原 一機

下十機の特攻機は昭和20年4月6日と12日都城西飛行場より沖繩に出撃、敵艦船に対し体当り攻撃を敢行した。戦功は5月27日聯合艦隊司令長官の名において聯合艦隊告示第一五八号をもって全軍に布告された。（表紙参照・伊東少尉、斎藤伍長は4月12日出撃）爾後終戦に到るまで、都城東西飛行場より出撃した特攻機「疾風」は七十九機をかぞえる。この間、第百飛行団の第一〇一、第一〇二、第一〇三戦隊は、都城、知覧他発進の特攻機の援護に任じた。毎年4月6日の慰霊祭に、戦隊生存者が見えるのも、この所以のものである。

本稿は特攻散華者に対し、身を以て特攻機の盾となり空華した戦闘機部隊の一例として第一〇三戦隊を取り上げたい。筆者も昭和20年5月4日、振武一九七隊長を命ぜられ、当初は沖繩作戦含みであった。沖繩の攻防がもう少し長引けば間違いなく都城東飛行場の三角兵舎に行ったことであろう。第一〇三戦隊には同期生が五名いた。そうなれば多分同期の彼等が直援してくれただであろう。だが沖繩航空作戦は第八次攻撃5月25日を以て終結した。第一〇三戦隊もまた、同日を以て戦力の回復を凶らざるの余儀無きに到った。歴

彼等の回向の爲にも直援戦闘機部隊の顔末を知りたい、この意味において、第百飛行団関係者によって、昭和37年8月編集された「空華」と、昭和60年8月編集「第百飛行団の軌跡」から第一〇三戦隊の記事を転載する。



都城の碑

〈空華〉

思い出の一年間

元第一〇三戦隊長 東條 道明
終戦後すでに十六年という長い年月が流れ去りましたが、一〇三戦隊長としての一年間程私の人生において感銘深いものは有り得ず、当時の日々は、走馬燈のように眼の前に浮んでまいります。多くの戦友を失った者として、遺族の方々に申し上げる言葉も御座いませませんが、当時の戦隊の状況などを紙上を御借りして御報告することも幾らかの御慰めになるのではないかと存

じ筆をとってみたいと思います。昭和19年8月25日第百飛行団司令部（初代飛行団長土井直人氏、第二代牟田弘國氏、第三代秋山紋次郎氏）第一〇一戦隊（初代戦隊長代永兵衛氏、第二代故末永正夫氏、第三代坂元美岳氏）第一〇二戦隊（初代戦隊長垣見馨氏、第二代林岩男氏）第一〇三戦隊（戦隊長小生）が、三重県亀山飛行場において新たに編成されました。

戦隊の編成は、本部、飛行隊（三コ飛行中隊からなる）、整備隊からなり、完全な編成であれば、飛行機は本部に六機、各飛行中隊十二機、合計四十二機ですが、編成当時は人員も少なく、飛行機は戦隊全部で一式戦闘機「隼」が十数機配当されたに過ぎませんでした。元来、第百飛行団は、南方における航空決戦に参加するように編成されたものでしたが、敵の反攻は意外に速く又膨大な物量で迫って来たために、南方第一線部隊への飛行機の補充に追われ、我々が四式戦闘機「疾風」を受領したのは漸く10月であり、その数も極く少数でした。パイロットは各戦隊共数名の実戦経験のある基幹人員の他は特別操縦見習士官出身者或は少年飛行兵出身の若い人達で、整備の人員も殆どが経験の浅い人達でした。

亀山飛行場では専ら訓練に明け暮れ

暑い盛り付近の小川で水浴すること
が唯一の楽しみであり、朝昼晩のお菜
に西洋唐辛子(ピーマン)を三日間食
べさせられて、うんざりしたのでした。
10月17日朝、四式戦試験飛行中に田島
中尉不時着殉職、早くも前途の多難を
思わせるものがありました。

これより先、敵B-29爆撃機は九州
地方の爆撃を開始していましたが、い
よいよ中京地区関東地方に対しても偵
察を行い、大規模な都市爆撃が予想さ
れ、又南方要域では台湾沖、フィリッ
ピン沖に敵機動部隊の攻撃があり、わ
が陸海軍の特別攻撃隊がこれを迎え撃
つて激烈な航空作戦が行われておりま
した。

11月、百一戦隊は大坂柏原飛行場へ、
百三戦隊は伊丹飛行場へ転進し、訓練
を続行しながら、阪神、中京地区への
攻撃を開始したB-29に対する防空任
務を与えられ、数回防空戦闘を行いま
したが、部隊の錬度も未だ低く、対爆
撃機戦闘の訓練も殆ど実施していなかつ
たために、高度一万余米以上で来襲する
敵機に対しては余り戦果が挙げられず、加
藤少尉が串本沖で敵一機に対し、損害
を加えたのが唯一の戦果でした。

昭和20年1月1日、四式戦の一コ中
隊を以て亀山、柏原両飛行場に示威
飛行し、終つて兵舎前で部隊全員の記

念撮影をし、近づきつつあった決戦場
への出陣記念と致しました。

1月下旬、第百飛行団は、九州に展
開中の第六航空軍(軍司令官菅原道大
中将)の指揮下に入り、飛行団司令部、
第百一、第百二両戦隊は宮崎県都城飛
行場へ、私共第百三戦隊は熊本県隈ノ
庄飛行場へ前進を命ぜられ、いよいよ
近迫した沖繩作戦に備えることとなり
ました。前進途中、口吉少尉殉職。

3月上旬第六航空軍の命令一陸軍航
空部隊の攻撃の重点は、敵輸送船団で
あり、戦闘飛行部隊の任務は、特攻機
の援護である。また、敵の沖繩上陸ま
では戦力を温存し、敵の来襲機に対し
てみだりに迎撃を行わず、飛行機は飛
行場周辺地域に分散隠蔽しておくこと」
を指示された。戦闘機は元来、敵の飛
行機を攻撃するためのものであります
が、沖繩作戦においては特攻機を援護
することを主要な任務として与えられ、
従つて特攻機を援護するために自由な
機動が限定され、相当不利な条件で戦
闘しなければならぬことが予想され、
最悪の場合には身を以つて、特攻機の
盾となる覚悟を必要とすることとなり
ました。

3月18日、九州、四國の全域にわたつ
て敵機動部隊艦載延千数百機に及ぶ大
編隊による飛行場攻撃があり、いよいよ

よ沖繩上陸が眉目の間に迫っているこ
とが感ぜられました。

3月25日、米軍は沖繩本島西側の慶
良間諸島に上陸を開始し、翌26日天号
作戦(沖繩作戦)の発動が下令されま
した。第百三戦隊は臨時に今津襲撃飛
行団に配属され、一コ中隊を徳之島に
前進させることを命ぜられ、飛行隊長
小川大尉を指揮官とし宮本中尉以下の
一コ中隊を先づ、今津飛行団長の居
られる鹿兒島県知覧飛行場に進ませ、
戦隊主力もその翌日知覧に進進しまし
た。知覧は陸軍の特攻基地であつて、
全国からの特攻隊が続々と集合し、悽
愴の気がひしひしと感ぜられました
南国のこととて、時恰も桜が満開で、
まことに陣を飾るにふさわしく、林
間にある仮設の三角兵舎で酒を酌み交
わしたことが昨日の事のように思い浮
かばれます。

3月28日、小川中隊は襲撃部隊を援
護して徳之島に前進、翌29日襲撃部隊
の沖繩西方の敵輸送船団攻撃を援護す
るため出撃し、襲撃部隊は敵輸送船数
隻を撃沈しました。

29日、30日徳之島は敵機の猛攻撃に
よつて滑走路を爆撃されたが、31日早
朝小川中隊は再び出撃して敵艦船を攻
撃し、宮本中尉は敵駆逐艦を攻撃して
火災を起させたが、被弾しかるうじて

徳之島南端に不時着した。同行した宮
本曹長は襲撃機上空を援護中敵機と交
戦して戦死。夕刻「沖繩南方海上敵輸
送船団一五〇隻北上中」の情報入手。
4月1日払曉徳之島、知覧から出撃
した攻撃隊は小川中隊の援護の下に多
数の敵機の攻撃を受けながら敵船団を
攻撃し、数隻を撃沈する戦果を挙げた。
しかしながら蟻のように群がる敵船団
は沖繩本島の沖合を埋め、ついに沖繩
に上陸を開始した。

4月2日、知覧から襲撃隊出撃、戦
果確認のため同行した矢島少尉戦死。
その後、徳之島は敵機の執拗な銃爆撃
をうけ小川中隊の可動機はついに三機
となったが、なお特攻機を援護して多
数の戦果を挙げた。2日午後、第百三
戦隊の四機を徳之島に前進させるよう
に命ぜられ、私は三機を指揮し約二十
機の特攻機、襲撃機を援護し、又整備
員を軽爆撃機に同乗させ徳之島に向け
て出発した。前進間編隊からやや後れ
た軽爆撃機は敵の奇襲を受け東村軍曹
長岡伍長は奄美大島付近海上で戦死し
たことが後に判明した。徳之島は敵の
爆撃をうけた直後であり一面の弾痕、
その間を縫うようにして特攻機等が復
行又復行して着陸し、私共が着陸する
頃はすでに夕闇となり、飛行場からの
布板信号により喜界島に向つたが、降

徳之島南端に不時着した。同行した宮
本曹長は襲撃機上空を援護中敵機と交
戦して戦死。夕刻「沖繩南方海上敵輸
送船団一五〇隻北上中」の情報入手。
4月1日払曉徳之島、知覧から出撃
した攻撃隊は小川中隊の援護の下に多
数の敵機の攻撃を受けながら敵船団を
攻撃し、数隻を撃沈する戦果を挙げた。
しかしながら蟻のように群がる敵船団
は沖繩本島の沖合を埋め、ついに沖繩
に上陸を開始した。

雨のため進入できず、再び徳之島に帰って暗夜の強行着陸を行いました。着陸停止直前に、先刻弾痕にひっかかって破損した飛行機に翼端が接触して破損してしまいました。午前中、徳之島から沖繩へ出撃した蘇少尉戦死。

徳之島には防空用の火炮の準備もなく又飛行機の修理設備も全くなき、破損した飛行機もみすみす見捨てざるを得ない状況で、四六時中の敵機の制空下であつて、遂に可動機は一機もなくなり、翼をもぎ取られた鳥同様に死んでしまつた訳です。日中は防空壕に退避し、敵の制空機を目を盗んで被弾状況を調べ、夜間も制空機の爆音を聞きながら暗黒の中で現地歩兵部隊の作業を督促しながら弾痕を埋め、払曉九州から前進して来る特攻機を沖繩に出撃させることが精一杯という状況になつてしまいました。

4月15、17日第三次総攻撃のため、知覧の片山中隊は第百一、第百二戦隊と共に多数の敵機と交戦し、沖繩飛行場攻撃に或は特攻機の援護上空制圧に奮戦して、西本、杉山各少尉古橋軍曹戦死。

21、22日第四次総攻撃、片山中隊は再度両戦隊と共に特攻機援護、出口、松本両少尉戦死。

徳之島は連日連夜の敵の攻撃をうけ

てついに前進飛行場として使用不能となり、パイロット全員根拠飛行場へ帰還の命を受けたので小川大尉以下は、4月24日小艇によって奄美大島経由喜界島から海軍機に搭乗すべく出発今津飛行団長と私は26日知覧からの軽爆撃機に搭乗して帰還した。

28日夜、小川大尉以下は海軍機二機に分乗して喜界島を離陸したが、その一機は敵の夜間戦闘機の攻撃をうけて村尾、加藤、沖中各少尉、沢田曹長戦死。

5月4日第六次総攻撃、第百飛行団は全力を以て特攻隊、襲撃隊を援護した。

筆者註、当日の戦闘に関し、平成14年7月東條氏から「特攻援護戦闘の一例」として口述があつた。

口述記

第六航空軍の第六次航空総攻撃と呼ばれた昭和20年5月4日の前日、私は都城の一〇一、一〇二戦隊も知覧に集結させ、翌日の行動について打合わせを行った。

4日第百飛行団の全力をあげた三個戦隊三十余機と、飛行団司令部の古参下士官編隊を指揮し、作戦任務は沖繩本島百里沖の敵大船団攻撃の特攻隊と襲撃の六五戦隊の援護であつた。

沖繩への列島線は米機の哨戒下にあると思うので、知覧を離陸後航路を西へ約五十軒ずらして南下する。当日は概ね快晴であつた。

援護する特攻隊は九七戦十六機、一式戦七機、四式戦六機、二式複戦二機合計三十一機と六五戦隊は一式戦三型であつた。特攻機は爆装の為その速度は遅い。直援隊は速度のばらばらな特攻機に合わせて、上空を蛇行飛行をしながら飛ぶ。特攻隊とは高度差一〇〇〇米を取り、高度四〇〇〇米で進攻した。

知覧から約五三〇軒の伊平屋島付近に到達。百里は未だ一〇〇軒先であつた。ふと見ると伊平屋島の西に五、六隻が見えた。その船団からは、黒煙が二、三ヶ所見えた。一瞬「附の輸送船団ではないか？」と疑念が沸いたが、特攻隊は直ちに攻撃を開始した。この時直援隊も落下タンクを落とした。

二隻の敵輸送船は、船体の真ん中に体当たりされ、丁度中央で二つに折れ、船首と船尾がぶつかるような姿勢で瞬時に沈むのを見た。又、他の輸送船からも黒煙が三ヶ所上がるのを見た。この間不思議にも敵の上空援護は無かつた。

更に南下すると、今度は一万トン級の大型巡洋艦三、四隻に駆逐艦五、六隻がやって来た。敵は特攻機と直援機に向けて、熾烈な対空砲火を浴びせて来た。敵輸送船はいないが特攻隊は突入を開始した。

この援護の為に我々も高度を下げたが、高度三〇〇〇米で我々を目掛けて無数の桃色のアイスクャンデーのような集中砲火を受けた。不思議に上空に敵戦闘機は見えなかつた。

そのうちに、大型の巡洋艦隊は主砲で海面に弾幕射撃を開始した。これは特攻機の超低空攻撃への防戦である。まるで劇場の緞帳のように、海上に海水の幕が張られた。特攻機はそれを避けて、五、六機が突入して行き、敵艦に数ヶ所黒煙の上がるのを見た。

知覧を出る時、以前同じ航空士官学校の区隊長同士であつた吉田穆六五戦隊長（襲撃機・一式戦三型）から「今日は宜しく頼みますよ」と挨拶されたが、この戦隊の攻撃ぶりは良く見えた。超低空攻撃は一寸判らなかつたが、数機の攻撃は確認出来た。

六五戦隊の攻撃後、アイスクャンデーの弾幕で良く見えなかつたが、特攻隊の二、三機が大型巡洋艦と駆逐艦に突入し黒い煙が見えたので、敵艦の何れかに体当たりしたものと思う。特攻機の攻撃も終了したらしく、敵の回避運動も無くなつた。

これで、首里方面の敵船団主力の攻撃は出来ずに終わり、特攻隊と六五戦隊の攻撃は終了したと判断され、同戦隊らしい一式戦十機程が北東に向かった。

空戦―巡洋艦隊を攻撃中に、ふと私の前に敵のポトシコルスキード4uが二機現れたのは全く驚いた。私の機の左下高度差一〇〇米位、二十度位の角度で右旋回し前に出て私の射線下

に入ってきた。敵は特攻機に目を奪われて、全然上空を見ていない。こちらは丁度良い射撃位置に在り、直ちに一連射した。射撃すると僚機はブリルに陥って墜落したが、最後迄確認する暇は無かった。ところが編隊長機は僚機が落とされた事を見ていなかったらしい。同じように右旋回して目前に来たのでこれも一連射で、ブリルとなり急降下して行った。之も最後迄見届ける余裕はなかった。然し知覧に帰って飛行団の下士官パイロットが「二機撃墜」を私に報告して呉れた。このようなあつけない「撃墜」はスッキリしない気分であつた。

帰途―当初の計画は、首里沖の主力船団攻撃終了後徳之島飛行場に降りて、燃料補給の後に知覧に戻る予定であつた。これには一ヶ中隊が燃料補給の間、交代で上空援護し敵の攻撃から味方を援護する為、兵力と時間を要する。

今回は目的の首里迄行っていない。空戦も無く、燃料に余裕があるので徳之島補給は止め、知覧直行に決心を變更した。処が、驚いた事には指揮官の私よりも先を飛んで行く四式戦が数機あるではないか。「戦隊長より早く帰るとは」と私は憤慨したが、その数は徳之島に降りて損害を出した。

徳之島に陸軍の防空火器の配備が無かつた事は、伝えて置かねばならない。沖繩作戦の当初、私は一〇三戦隊を率いて徳之島飛行場に在って「特攻隊の収容と援護」の任務を貰っていたが、対空火器の配備はなく、敵に制空権を奪われ、爾後の「特攻作戦」に齟齬を来たしている。之に比し海軍は、喜界島に始めから対空火器を置いて、飛行場の機能を終戦迄維持したと言う。

帰りは列島線の上空を飛んで帰った。屋久島の西上空四〇〇〇米で飛行している時であつた。ふと見ると我々の西を高度三〇〇〇米で数百機の敵艦載機がまるで観兵式の如く整然と編隊を組み、後上方には高度差を持った戦闘機群が戦闘隊形で、上空援護しつつ悠然と南の方へ帰って行く。

一瞬「こちらにも三十機あり、後から攻撃を掛けては」と思った。が「待てよ、こちらは未だ三〇〇時間のヨチヨチの戦闘隊員だ。危ない。我慢だ」と、

その儘北に向かった。先方も同様であつたのだろう。双方共手を出す事なくその儘別れた。私が以前南方で戦闘していた時とは、この時の戦闘隊員の練度は大きく下がっていた。例え若干の戦果を挙げても、こちらの損害が大きいことは十分予想された。

この時知覧に帰って「この敵の追尾攻撃」の意見具申を軍司令官に申上げたが、反応が無かつた。私は司偵を洋上の要点に配置し、高度一万米で哨戒し、艦載機の掃役に追尾し雷撃隊を以て、着艦時の敵空母攻撃を考えたのであつたが。

尚、無線が殆ど使えずなく、戦闘中、十分な意思疎通が行えなかつた事は残念であつた。以上

以上を以て、口述記を終り、

再び〈空華〉から

5月7日、知覧から都城西飛行場に移動。

5月11日第七次総攻撃、第百飛行団選抜の一ヶ中隊は他の攻撃隊と共に沖繩に殺到して「夕」弾（小型爆弾を多数収容した爆弾）による超低空飛行場攻撃を敢行して飛行場の各所に對し多大の戦果を挙げたが、上村、山崎両少尉、稲田伍長戦死。

5月14日、鹿屋海軍航空隊の敵機動部隊攻撃を援護するため、未明から飛行団全力で鹿屋上空制空、来襲した敵機と交戦して任務を完了したが山下曹長平山伍長戦死、片山中尉は落下傘降下して負傷。

5月25日第八次総攻撃、私は数日前から原因不明の高熱（筆者註、マラリヤ）に悩まされていたので、止むなく小川大尉以下が特攻隊の援護のため出撃、悪天候の中を沖繩上空に進入、激戦の中に特攻機は突入して大戦果を得たが、わが戦隊は沢近、稲原、中島、遠藤、坂元各少尉、豊田曹長丸千重曹、高橋、新田、渡辺各伍長戦死。部隊の戦力は一挙に大損害をうけ、パイロットは全滅に近い状況となつた。

飛行団は各戦隊共に殆ど戦力を失つたため、ついに6月上旬パイロット、飛行機を補充して戦力を回復のために東京成増飛行場に移動、他部隊からの補充も殆どできず、ついに百二戦隊は編制を解かれ、その人員、飛行機は第百一、第百三の戦隊に分属されることとなり、鋭気を養いつつ訓練に専念した。対地攻撃訓練中三木、平田両中尉空中接触し殉職。成増において沖繩作戦以来の戦死者慰霊祭挙行。

第百飛行団司令部は都城から四国高松に移動して敵の本土上陸にそなえて

作戦を準備していた。敵の日本本土上陸も間近になり8月上旬第百一戦隊は高松飛行場へ、わが百三戦隊は淡路島由良飛行場へ移動。

8月15日終戦。8月16日、敵艦隊土佐沖に出現の情報が入り、全機爆弾搭載、17日払暁出撃直前、司令部からの攻撃中止命令を受領。

昭和19年編成以来約一ヶ年、戦隊史の概要を走り書きした次第です。

大空に散った若い戦友の御霊に合掌しつつ筆を擱きます。以上

昭和60年、「第百飛行団の軌跡」が一白会によって発行された。飛行団の最後を飾る第八次航空総攻撃に関し次のように述べている。

「第八次航空総攻撃」

5月18日第三十二軍から「現戦線の保持は至難となり、戦略持久は終焉に近づく」旨の報があった。

5月17日以降は天候悪化し、時折少数の特攻機の出撃にとどまった。

5月24日夜義号作戦が発動され、義烈空挺隊が出撃した。義号作戦は23日一旦発動し、重爆隊出撃するも沖繩の天候不良のため急遽中止、24日再行した。

義烈空挺隊は一九〇〇健軍から重爆

十二機に搭乗して出撃、二二〇〇北飛行場に五機、中飛行場に二機強行着陸勇戦闘、一時敵飛行場を混乱におとされた。

5月25日、義号作戦を拡大するため第八次航空総攻撃が行われた。攻撃の概要は次のとおり。

一、特攻攻撃

- 知覧二十九、万世丸、都城東二十四、太刀洗二、計六十四機。九七戦七、一式戦十四、三式戦九、四式戦二十五、四式重二、二式高練七であった。

特攻機は約百二十機準備されるも〇七〇〇以降沖繩は雨となり、引返し機が多かった。

二、第百飛行団は四式戦特攻機を援護

第百飛行団は小川大尉を指揮官とし、第百三戦隊全力十一機で出撃した。小川編隊は都城東に展開中の第五十七振武隊十一機、第五十八振武隊十機、第六十、第六十二振武隊各一機、計四式戦特攻二十三機とともに〇五〇〇離陸、悪天候について出撃した。

沖永良部附近でシコルスキーと遭遇、一部をこれに指向、主力は引続き南下、与論島附近で再び敵戦闘機約二十機と遭遇、交戦、この間特攻機は泊地に向け突入した。空戦後小川大

尉のみ大村飛行場に不時着、翌日原隊に帰還したが他の十機は未帰還となった。戦死者は次のとおり。

沢近少尉、稲原少尉、中島少尉、遠藤少尉、坂元少尉、豊田曹長、丸子軍曹、高橋伍長、新田伍長、渡辺伍長

この戦闘で第百三戦隊は一挙に精鋭多数を失ない、空中勤務者の戦力は壊滅に近い状態となった。

この日戦死した故稲原少尉の戦死状況を戦隊から御遺族におくった公報の一部は次のとおり。

稲原少尉ハ五月二十五日五時二十五分特別攻撃隊(二十三機)ノ直接援護ノ為挺進制空隊第三小隊分隊長機トナリ沖繩島周辺迄特攻機ト同行スベキ任務ヲ以テ勇躍都城飛行場ヲ出撃セリ。

挺進制空隊ハ小川大尉ノ指揮スル十一機特別攻撃隊ハ二十三機ナリ。〇七四五分高度四千米ヲ以テ沖永良部島上空ニ到ル折柄待機中ノポートシコルスキー(機数不明)特攻隊ニ攻撃シ来タルヲ以テ稲原少尉ノ属スル第三小隊ハ独断

之ニ反撃第三小隊ハ敵機二機ヲ瞬時ニ撃墜セシメ尚攻撃ヲ続行シ再ビ二機ヲ撃墜スルヲ目認セラル爾後敵機遂次増加シ紛戦トナリシタルモノノ如キモ第三小隊ニ生還者ナキ為不明ナルモ前後ノ状況ヨリ判断該空域附近ニ於テ戦死

セル事殆ンド確實ナリ尚本出撃ニ於テ生還セル者ハ小川大尉ノミニシテ他ハ全員戦死セリ又第三小隊決死ノ援護に依リ特別攻撃隊ハ完全ニ成功セリ

第百飛行団はこの戦闘を最後に沖繩航空作戦に出撃することはなかった。以上

後記

特攻機を阻む敵戦闘機と交戦、排除し、或いは身を以て特攻機の盾となる。文中の澤近太郎、稲原茂、中島成、遠藤正弘各少尉は同期生である。五十七期生霊鑑5月25日に名を連ねている。

合掌 (深川 巖筆)



都城にて57期の精鋭

- 稲原茂
- 遠藤正弘
- 58振武隊長 高柳 隆
- 澤近太郎
- 中島 成
- (全員5月25日戦死)

富嶽隊々員の遺書

田中 賢一

「陸軍特別攻撃隊富嶽隊と隊長軍神西尾常三郎をしのぶ」
という同期生が作った書物の紹介は前号に出したが、私の読後感はこの通り

嗚呼富嶽隊

靈峰富士を仰ぎみる その名も床し 富嶽隊
予て期したる事なれば 丈夫の命つみかさね
やまとしまねを護るべし
仇なす榮敵屠らんと やまと心を 弾と化し
われとわが身を 敵艦に 砕けて散らん 志
心に残る 隈もなし
故郷に在すたらちねに 秘して別し今ここに
わが余す命捧ぐべし 愛しきはらから共々に
健やかなれと只祈る
陸軍嘯矢の 富嶽隊 全軍の期待背に負いて
敵艦求めわだつみを 我突入の ひとことに
永遠に絆は途絶えたり
抜山蓋世の勇あるも 時に利あらず驩逝かず
大厦倒るを支えんと 捧げし命の甲斐なきも
民族の誇り消ゆるなし
十八烈士のごとく 国に殉ぜしまごころは
ああ悠久の大義てう 生死を越ゆる 心根に
今も鬼神は 涙せむ

十一月三日 読み了りて作詩 田中賢一



富嶽特別攻撃隊出撃前の記念写真
昭和19年11月フィリピン・クラークフィールド基地

この書物の掲載記事で最も感銘を覚たのは隊員の遺書であるので、編者の了解を得て、この部分を転載する。
この書物は協会にあり、¥1000 申込あれば送ります。

富嶽特別攻撃隊員の遺稿集

陸軍士官学校六十期生 曾我 睦郎

私は富嶽特別攻撃隊員曾我邦夫の弟であります。私の手許に西尾常三郎大佐ご令兄故飯田佐次郎氏、年余の時日をかけて全国の遺族のご家庭を慰霊し廻り、纏められた「富嶽隊遺稿集」があります。それを拝見すると富嶽隊特攻勇士のご心情が明々と同われ、胸を打たれます。

一点の迷いもなく純粹無雜、玲瓏珠のごとき心境がうかがわれる石川少佐。魂の清々しさと優しくも凛と雄々しい柴田大尉。戦陣の灯火の下、任務を全うすべく坦々と、しかし内に熱烈たる精神を現わす古澤少尉。大事を明朝に控えるも、整然として後事を託す心に一点の乱れもない丸山少尉。純粹に空中勤務者の職分に徹する、強烈な意志をあらわす須永少尉。空の軍神たるを自ら確認し、母、兄に欣然と告げ、戦果を期待すべく伝える米津大尉。出撃前夜、二通に及び細部にわたり切々と書き綴る情愛の籠る遺書と言うべき国重中尉。七十日余にわたる必死の戦陣に、連日苛烈な緊張を強いられる中、ふと忙中閑あり、悠々たる姿勢の内に深層の緊迫感を漂はす曾我中佐。戦陣の中、雨に寄せて心中を吐露し、人間性を垣間見せるが、忽ち勇猛心を奮い立たせる幸保少尉。烈々たる闘志を内に封じ、淡々と無私無欲に任務の完遂に直進する、正に大丈夫の言たる根本中佐。

祖国祖先に報いる為、身を投ずることの喜びを綴る、すべての遺稿が日本人の魂の結晶、珠玉の

章と言えましよう。弱冠二十代の若武者に、正しい日本人たる精神の昇華の思考を生み出させた基は奈辺に。西尾隊長の強烈な指導力と相俟って、率先挺身の気魄が富嶽隊部隊教育の原点であったのではないでしようか。

富嶽隊遺稿集より

石川 廣少佐

十月二十四日大任を拝し、不肖皇国に生を享け今此の死所を得たるを最大の喜びとす。五十年の人生を築くに孜々汲々とせずして、今や悠久の大義に生き得るを最大の喜びとす。廣は有史以来の幸福者でした。只、皇恩、祖先父母衆生の恩に感ずるのみ。絶対の死に向かふ明鏡止水の心境、只愉快のみご両親様にも健やかに、特に悲観されずむしる大いに喜んで下さい。では

十月二十四日 石川 中尉

柴田 禎夫大尉

「愈々征きます」心中清澄、後に続く者を信じて笑って征きます。「国体の悠久の生く」今こそ口頭禪ではなく、実際に行う秋が来ました。柴田の名に恥じめよう決行します。

今更ご厚恩の何のというのも他人くさくなりすからそっと抱いて征きます。姉さんのいる家で兄弟らしい生活の出来なかつたことは残念でした。何卒御自愛下され柴田の家を守り立てて下さい。

君が代の やすらかなりせば 鄙に住み 身は花守と なりけむものを

男児非涙無 不瀟別離間 柴田 少尉

古澤 幸紀少尉

謹啓 愈々寒気加はる毎日と存じます。御両親様始め御一同様お変わりありませんか。幸紀武運つたなく未だ凡々と日を送って居ります。然し体は何処へ行っても至極大元氣、良いエモノを求めんと鋭意努力し士気を高めて居ります。

内地の寒さがうその様、こうして居ても汗がじわじわと浮かんで来ます。かなり暑いですが暑さはすでに支那漢口にて試験済み。でも油断せず充分注意してやって居ますからご心配なく。

最後に皆様の御繁栄を祈ります。大日本帝国の鋼業を祝しつつ

十一月二十九日 薄暗い灯火の下にて 陸軍軍曹 古澤 幸紀

丸山 茂雄少尉

姉上様には嫁ぎ参られてより間もなく兄上出征なし続いて茂雄も入隊し、年老いたる両親と小さな弘人とそれに我儘な誠史、一同の面倒を一人に引き受け家を守り居てくだされ、本当に何とも御礼の言葉も有りません。今後何分直敷く御願ひ致します。茂雄、この度軽き身を以って重大任務を頂き、日本男子として最高の良き死地を得ました。

軍人としてもこの上もなき光榮、感激に胸がいっぱいです。必ず必ず成功して見せます。そして、笑って悠久の大義に生きます。

兄上も近々には帰られる事と存じます。何卒それまでは辛い事も有るでしょうが、我慢して御家守り下されたく御願ひ致します。

姉上様の御健康と御多幸を遠き地よりお祈り致して

居ります。弘人ちゃんの可愛い、顔が何時か眼に浮んで来ました。では乱筆にて 攻撃前夜 クラークにて 丸山 茂雄

須永 義次少尉

父上母上 明朝攻撃を決行いたします。之もとより男子の本懐とする處、喜んで小官の壮行を送って戴きたくお願ひいたします。此の様事は軍人として入營する時より心に堅く決して居りました。特に空中勤務者としてこの上ない名譽と喜んで爆弾飛行機に搭乗致します。

身は爆弾となって米空母に体当りを致します。二人に対して空母一隻と約二千名の敵兵、百余機の敵機と運命を共にする事、実に壮快では有りませんか、喜んで下さい、ラジオニュースや新聞を読んでほめて下さい。

ただ病身の両親を残して行く事が唯一の心残りであります。しかし兄上も在り妹弟もある事ですから、何も心配せず充分養生して早く丈夫な体になって下さい。

小官の身は碎けて家には遺骨も帰りませんが、小生の心は入營の時の荒鷲の置き物と、鎮守様と家に植えた記念の木を私と思つて大事にして下さい。では、これにて今生の別れを致します。

昭和十九年十一月十二日

富嶽部隊 須永 軍曹

米津 芳太郎大尉

別離

急速出勤で詳細を申し上げられず、失礼致しました。

真珠湾の特殊任務以来、暫し再興されなかつた特別攻撃隊、愈々我々の手で結果する事になりました。空の軍神たるべく一意任務に邁進しております。では戦果をお待ち下さい。

兄上殿 空の軍神 米津 大尉
親に先立つ不孝をお許し下さい。大君の御楯として靖国の守護神になる芳太郎のご故、母上も御欣び下さる事と存じます。
只、老後の母上に御心配を御掛けするのが何よりの苦衷です。どうぞお許し下さい。

母上様 空の軍神 芳太郎拝
国重 武夫中尉
明朝、醜敵滅ニ向フ
我軍人トシテ決戦下死所ヲ得タルヲ喜ブ 後ニ残ル由喜子ハ軍人ノ妻トシテ自重セヨ 尚生マレル子供ノタメ身体ヲ大切ニシ子供ノ将来ヲ呉々モ頼ム 御両親、御親族ノ方々ニ宜敷ク申シ上ゲテクレ

十一月十一日 二〇時三〇分
陣中にて 武夫
明朝、醜敵に対し身を以て攻撃を敢行す
一、我戦死後は軍人の妻として充分に自重せよ
二、生まれる子供の将来を考え呉々も自愛の上強く正しく生きよ

三、子供の養育は誠心と愛を以て当るべし
四、教育は最大限なるべし 然し其の性格を見抜き伸びる道を進ますべし 職業何れにても可なり
五、身重の身なれば寒き暑さに気を付け安産を祈る
六、母なる職分を全うすると共に子供の将来を呉々

も頼む
十一月十一日 二三時五〇分
由喜子殿 於陣中 武夫

曾我 邦夫中佐
人生僅か五十年、然も昭和の聖代に生を粟けし者として我より幸福な者あらんや「欣然死地に投ず」之我が心境なり 人と生まれて二十有五年、如何に座禪を組むも吾得し得ざりし生死の解脱も、今や秋天の如く爽かに澄み渡れり
我は征く 坦々たる心境を以て我が後に続く者を信ず 我が戦死の況と戦果を照覧あれ

十月二十四日 曾我 邦夫
拝啓 お交り有りませんか、そちらは大分寒くなつた事と存じます。出発以来益々元気ここ前線基地で神機到来を待っております。
特別攻撃隊と言っても、攻撃に出れば必ず目標にぶつかると言うものではありません。目標位置を突きとめる事が非常に困難です。隊長が征かれた時は私は同時に編隊長として攻撃に参加しましたが、新聞にあつた通り武運に恵まれず帰還しました。
然し神機は刻々と私に近づきつつあります。
内地は寒い風が吹いている事でしょう。戦地に来て日本の美しさ、日本の好き、日本の有難さ、日本の偉大さ、そして日本人として生まれた幸せをつくづく感じます。

十二月五日
我が家の 純忠 尊皇 滅私 以て皇国の御柱たらん
父上母上の御教育御仁慈は、私を正しい日本人として育てて下さいました。厚く感謝に堪えません。陛下の醜の御楯が陸統として我が家より輩出する事を念じ、且つ之を信ずるものなり。
父上母上永らく御世話になりました。御健康を御祈りします。

十二月九日
富嶽特別攻撃隊 陸軍大尉 曾我 邦夫
幸保 栄治少尉
奇烈な戦場の真只中 意気愈々高し
今日は珍しく雨である 酒を呑んで我を忘れる時は実に朗らかである
雨はいやだ 忘れようとしても生きた血の通う五尺の体 いらいらしてくる
やがて命下るや日本晴れ
見事、空母にと唯神に祈るのみ
十月三十一日
大空に身を捧げし若櫻より

御両親 御一同様
前日出撃するも求むる敵なし
本日只今より待望の攻撃に出発致します
富嶽の翼下 醜敵米を摺伏せしむる以外にはなにもなし
義は富嶽 死は体当
空母迄は武運強かれ 御楯われ
成期念じあるのみ

出発致します

十一月十三日

特攻部隊 富嶽飛行隊 栄治

根木 基夫中佐

比島の決戦は刻々緊迫して將に有史以来の危機を包蔵するに至りました

此の好機に投じて、丈夫一個の心身を傾倒して御国に報ずる喜びは何物にも代えられません

唯この間烈々たる闘志を持しつつ、一切の環境を放棄して終始しますが故に、美言を残さず慧星のごとく逝くを予想しています

何卒皆様御大事に御葬し下さい

十二月九日

陸軍大尉 根木 基夫

終りに富嶽隊出陣に参列された、高橋 貴少尉とクラークにて突入信号(国重機と思はれる)を受信された嶽野忠顕氏(少飛12期)からの記事をご紹介します。

高橋 貴氏

私は予備役少尉(幹部候補生)として浜松陸軍飛行学校(改称後は教導飛行師団)に空中勤務者(機上射撃)として曾我中尉には公私ともに大変御世話になった者であります。

平常の訓練には曾我中尉機に同乗させて頂き、標的機には根木中尉を筆頭に国重准尉、幸保曹長等が当たられることが多く時には西尾少佐自らが操縦されて私共が同乗する事もありました。

特別任務要員として発令のあった十九年十月二十四日後の隊員の生活態度は平常と何等異なることなく、二十六日出発当日の感激は終生忘れ難いものがあります。

航空総監菅原道大中將、川上師団長の背後に私共は整列し壯途を見送りましたが、最新鋭機のキ一六七(四式重爆撃機)の異様な三メートルもある棒状起爆管に眼を見張ったものでした。……

嶽野 忠顕氏

私は富嶽隊など特攻隊慰霊祭に参列しました突入時の無線交信に当たった者です。

少年航空兵12期で通信課程に進み、マニラの南方航空路部に配属され昭和十九年八月上旬から二十年一月までクラーク飛行場に居りました。航空路部通信隊は主要基地に展開して、内地から前線に補給される各種航空機機輸送隊との交信業務が主たる任務で、実戦部隊ではありません。

十九年十月頃富嶽隊が来比され、一機一艦体当り戦法の特別攻撃隊と聞き、大変な状況になったと愕然となりました。毎日、一六〇〇キロの爆弾を積み先端には約3メートル程に突出した信官棒を備えて、キーンという金属音を立てての突入訓練には心身の凍る思いでした。

十月下旬中隊長より、第四航空軍司令部から富嶽隊の突入作戦に協力依頼があったので君が直接当れと、大変な任務を負ったと非常な緊張感を帯びた事を覚えております。出撃命令がない時は本来の業務遂行、発令あれば即との待勢にての日々でした。

出動は、十一月七日頃ルソン島東部洋上に敵機動

部隊、夕刻雨のため捕捉困難にて掃投。そして十三日突入敢行となりましたが、十二日の夜半「富嶽隊の方が見えています」と起こされ数分対談致しました。

「明日出撃します、お世話になりました」の言葉は記憶していますが、御兩名の御氏名はもとより話の内容もどうしても思い出せませず残念です。訪問の方は准尉と曹長の方でした。

十三日は夕方の五時頃離陸ルソン東方の機動部隊を攻撃に。四十分を廻った処、突如交信あつて

「全員士氣旺盛、協力有難う、お世話になった」と

私は此の場に臨んで沈着冷静な電文に接し、返電の文章も詰って生文にて「御成功を祈る」と打電した気がして居ります。後日叱責を受けても甘受する一心でした。

六時過ぎに戦艦に突入するの打電、そして続いて突入態勢に入った連統長音(ツーという発信音)十数秒続いたと思います。音が絶えた瞬間が体当りの時です。私は情況から察して戦艦轟沈と認め報告しましたが、心の空しさ言い様がなく、此の協力は之で辞退したいと申し出て司令部より了解あり此の後に従事しておりません。

明けて昭和二十年二月、第四航空軍司令部の指示にて隊長以下八名台湾に参り、帰比不可能にて終戦を迎え今日に及んでおります。復員早々に消息を求めましたが、私の部隊は復員局通報では全滅となっております。

以上要を得ないかも知れませんが、一端を申し上げる次第でご容赦下さい。

皇国史観国史学の泰斗

平泉澄博士の特攻二軍神に捧げる歌

人間魚雷「回天」の創案者で殉職した黒木博司少佐は、平泉博士の魂の分身者だった。黒木少佐の葬儀は、戦後二十一年十一月七日郷里下呂の弾島寺で行われたが、その前日の通夜の席で平泉博士は、次の一詩を奏上した。

黒木少佐を弔う

一、

秋ふけて 飛驒の山々
もみぢげに 映ゆるをみれば
想ひいづ 純忠の士

一生涯 頂天立地

報国の 丹きまごころ

二、

笑止なり 世の顯官
廟堂の 高きに立てど
情報は 余すなければど

見通さず 国の行末

徒らに 月日を送る

三、

君思ふ ま心をのみ
唯一の たよりとなし
眺むれば 火を観る如し

盟邦の くらき運命

わが国の 苦しき歩み
四、

眠られぬ 夜をば徹し
血もて書く 非常の策
謹みて 上に献じつ

浪くぐる 決死の術
難きをば 自ら擔ふ

五、

皇国に 幸しありせば
いしぶみに 黄金ちりばめ

琅玕の 墓をも立て
いさをしは 村々伝え
日々 に ひろく讃えむ

六、

今集ふ 友わづかにて
とぶらひは 寂しくあれど
天かけり 見ませみ靈よ

血に泣きて 沈める月の
消えやらぬ 影悲しむを

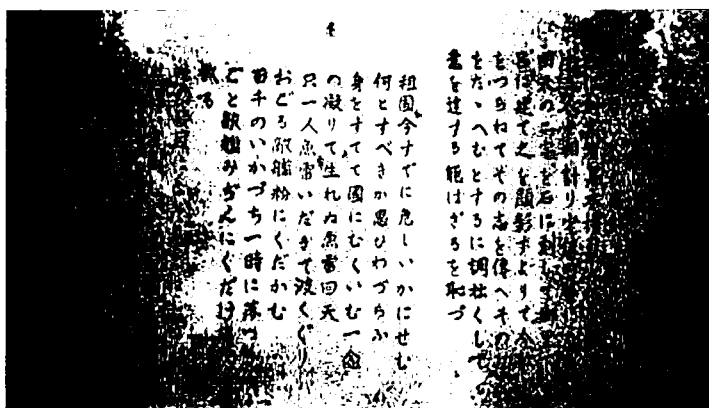
昭和丙戌霜月四日朝草之

平泉 澄 博士

平(花押)



下呂信貴山にある回天碑と碑文



回天の功績を語りし碑文
皇國の歴史に刻みし
名は是れを 顕彰すよりて
まつらねど其の志を傳へし
をいへむとすに 詞なくして
書を述ぶる能はざるをわづ

祖國今すてに危しいかにせむ
何とすべきか思ひわづらひ
身をすてて國にむくいむ一命
の湛りて生れぬ魚雷回天
只一人魚雷いなきで波くぐり
おごる敵艦粉にくたかむ
お千のいかづち一時に落つ
ごと歌難みぢんにくだけ
あはれ

緒方襲少佐は平泉博士の京都の青々
塾にて薫陶を受け、深く傾倒していた。

海軍飛行予備学生で任官、二十年三月
二十一日第一神風桜花特別攻撃隊の桜
花隊員として鹿屋出撃、九州南方洋上
で戦死した。兄の徹大尉も海軍飛行予
備学生出身で、それより先比島方面で
戦死しており、兄弟の葬儀は二十一年
八月八日に行われた。平泉博士はつき
の歌を霊前にささげた。

兄弟 嚙並べて 皇国の 難に赴き
遂にかへらず

尊しや 花の盛りを 皇国に 捧げ
て悔いず はらからふたり

太平洋 八重の潮も 心して 浮か
べあつめよ 二ひらの花

梓弓 引きかへさざる 益良雄の
決意もしるし 深き日に

久方の 月の光の 曇りなき 友の
瞳をいつか忘れむ

言ひのこす 事更に無し 深く 花
と散るべし 乞う安んぜんよ

あゝこの語 去年のむ月の 末つか
た 聞きしぞ永久の 名残となりし

爽けき 言葉ならずや 益良雄が
出て立つ際の 覚悟示して

目とづれば 浮かぶ佛 今もまた
ありし目惚び 只涙する

「回天」の発案者

黒木博司の事蹟

協会発行の「特別攻撃隊」の關係事項抜

黒木博司中尉、仁科関夫少尉の二人は、この93式魚雷に着目し、呉工廠魚雷実験部の指導を受けながら人間魚雷

の設計に取り組んだ。魚雷に潜航艇の機能を持たせるには、潜航・浮上・観測・変針等が自由自在でなければならぬ。不眠不休の努力の末、18年秋の終りに案が成り、人間魚雷の設計図と意見書が海軍省軍務局の吉松田守中佐のもとに届けられた。しかし当局では死を前提とする兵器は採用できないと却下した。(既にこの8月には竹間忠三大尉から、また年末には近江誠中尉から人間魚雷の構想が軍令部と連合艦隊司令部に提出されている)

昭和18年末、意を決した黒木、仁科の両名は上京し、軍務局に吉松中佐を訪ねて人間魚雷の採用を要請した。吉松中佐は軍令部に連絡すると共に軍務局第一課長山本善雄大佐に報告した。山本大佐は二人に対し「必死必殺の人間魚雷は、天皇陛下の大御心を拝察すると軽々には採用できない」と説得した。19年2月11日二人は再度上京してその採用を迫った。1月末のクエゼリ

ン、ルオットの玉砕は戦局の急迫を思

わせていた。2月17日海軍の牙城トラック島が空襲により大損害を受けた。遂に意を決した当局は、2月26日付で呉海軍工廠魚雷実験部頼悳吾少将に対し

「㊦(マルロク)」と仮称して兵器の試作を命じた。

試作は渡辺清水技術大佐のもとで鈴木博技術大尉、楠厚技手、有坂技手が担当した。試作に際し、当局から脱出装置を付するよう指示されたので計画は大巾に遅れた。黒木・仁科両名とも脱出装に猛反対し、一日も早い戦力化を要求した。かくて、19年7月初め「㊦金物」三基の試作が完成した。同月末、呉軍港港外、情島東北の大人魚雷射場で航走試験が実施された。一号艇黒木大尉、二号艇仁科中尉のそれぞれ五分間の航走試験は成功裡に終了した。

昭和19年8月1日海軍大臣の決裁があり、「㊦金物」は正式に兵器として採用されるところとなり、その名も黒木大尉提案のとおり「回天」と命名された。

回天の訓練

回天は、上げ下げ自由な一メートルの潜望鏡を備え、潜航、浮上、変針、変速が自在で、一定の深度、速度を保

ちながら自動的に操縦するようになっていた。これを操縦し敵艦に体当たりする搭乗員には、潜水艦の艦長のような技能と練度を必要とした。

前述のように回天基地の開設とともに訓練が開始された。各基地とも一回の訓練は一〜二時間であった。発射場から回天が発進すると、訓練の成果確認と危険防止のため見張員の乗った内火艇、魚雷艇震洋艇等が追躡艇として回天のあとを追ひ、飛行機も上空から監視した。

訓練は日出前から日没後まで休みなく行なわれた。しかし訓練海域、訓練用回天の数に制限され、しかも機材の整備に時間がかかったため、一日の訓練本数は一基地15〜20基で、乗員の養成は容易には進まなかった。

訓練は同乗訓練の後単独訓練に進んだ。航行艦襲撃訓練には駆逐艦などが標的艦として協力した。

訓練中の殉職者

昭和19年9月6日、訓練開始二日目の夕刻、荒天をつけて訓練に出発した黒木、

樋口両大尉搭乗の回天は帰投予定時刻を過ぎても浮上しなかった。基地隊は総力を挙げて搜索したが発見できず、翌7日10時予定コースで気泡を発見、引き揚げたが二人は既に絶命していた。

訓練開始直後に発生したこの事故は、創始者黒木大尉の死とともに回天部隊の前途に暗影を投げかけたかと思われる。しかし眠ったような二人の遺体と、艇内に書き残した壮絶なその遺書は、隊員の間には凄まじい感動と闘志を巻き起した。黒木大尉が絶命するまでに回天内で書いた二千余文字の遺書には、事故発生時の状況、応急処置、事後の経過、今後の対策等を冷静に記述して余すところなく、しかも困を思う至情で貫かれ、読む者の壮絶な感銘を与えた。実に黒木大尉の死が、その後の回天作戦の実行を可能ならしめたのである。

回天の発案者 黒木大尉の遺書

靖国神社編

「いざさらば我はみくにの山桜」

より

これらは、出撃三〇分前に、鉛筆で海軍手帳に走り書きした絶筆の辞世である。

関西大学
緒方襄命



熊本県出身

海軍第十三期飛行科予備学生

大正11年9月3日生

昭和20年3月21日没

満22歳

海軍少佐

昭和二十年三月二十一日、「第一神風桜花特別攻撃隊神雷部隊桜花隊」隊員（ロケット攻撃機「桜花」搭乗員）として母機一式陸上攻撃機に搭乗、鹿屋基地を出撃、九州南方洋上にて戦死。

清がすがし花の盛りにさきがけて玉と砕けむ丈夫我は
死するともなほ死するとも我が魂よ
永久にとどまり御国まもらせ

緒方中尉は兄徹と相共に、国史学の泰斗平泉澄博士の門下に入り、連綿、脈々として皇国を護持し来たった我が青史の奥義に心酔するとともに、関西大学在学中、大東亜戦争風雲急を告げるや、学徒として出陣、海軍に入りさらに特攻を志願した。

兄も行け我も果てなむ君の辺に悉々果てむ我が家の風
という和歌がある。

兄徹もまた海軍中尉（海軍第十二期飛行科予備学生・京都帝国大学Ⅱ昭和十九年十二月二十五日、比島ミンドロ島にて戦死）であり、大学ノートにしたためた「我が家族に」と題する詩集を、昭和十九年七月、北方の戦地より故郷に書き送っている。その中の「襄」とともに」には

二人を隔つる緯度二十度 兄は北にあり、弟南にあり
その昔 肩を並べて通ひし 中学生
鞆古びて今は家にあり
年を経て 空に眞棘の焰燃え 正義
凄壯の戦 日に日に苛烈なり

二人また 肩を並べて空に向ふ 我が家のつたなき兄弟
生命を捨てて空に伝統を創らむとす

此の家の伝統
兄弟の奮闘如何にかかる 襄、徹
いみじくもつけつけ給ひし父の魂
名に刻みてともに進まむ 兄は北にあり弟南にあり

かように緒方家、兄も弟も師の教えを受けて、憂国の情を詩に和歌に謳い上げ、悠久の大義に生きる喜びを吐露している。

また、兄弟だけではなく、この二人を育てた母もまた御国思いの歌人であった。

襄中尉より特攻隊員志願の決意を聞かされた母三和代さんは、今生の別れにこの任地に赴くのであった。

うっし世のみじかきえにし母と子
が今宵一夜を語りあかしぬ

これが、その折の和歌である。そして帰宅後、襄中尉がひそかに母の鞆に
入れていた辞世

いざさらば我は御国の山桜母の身元
にかへり咲かなむ

を発見する。この時、母三和代さんは
散る花のいさぎよきをばめてつゝも
母のこゝろはかなしかけり

と詠じている。

散り逝かんとするわが子を見て、どこに悲しまぬ母がいようか。しかし、この母は尚、子の潔さをめでんとするのである。

かかる母の下に生まれ、かかる兄と憂国の恩師に導かれた襄中尉であった。



兄の徹中尉（左）と



桜花を抱いた一式陸攻

黒木博司の事蹟

小灘 利春

岐阜県出身 海軍機関学校第51期

大正10年9月11日生 昭和19年9月7日殉職 満22歳

海軍大尉 没後少佐

黒木博司少佐は、機関学校生徒の頃から東京帝国大学の国史学教授平泉澄博士に傾倒し、この国が不滅であるために為すべきことを自ら求めた明敏な洞察力をもって、国際情勢の変転と戦局の行方を予見し、我が国の将来を憂慮していた。

大東亜戦争勃発に際し黒木少佐の感懐は、
すめるぎの国威ぶるか興るかの
戦いなるぞ征けや益良雄

当初、潜水艦乗りを希望して潜水学校学生となつたのち、特殊潜航艇の搭乗員を熟願して、機関科将校初の艇長となつた。その基地大浦崎にあつて、特殊潜航艇の進歩改良に力を尽くしたのであるが、もはや特潜では今後の戦局に対処するには間に合わないと判断、物資の乏しい我が国を救うには、一艇の体当たりで一艦を沈めてゆく肉弾兵器しかないとの結論に至つた。この構想を仁科関夫少尉ほかの特潜艇長たちと協力して練り上げた

黒木少佐が昭和19年1月、血書してその成功を誓つた歌は、

忘れめや君斃れなば吾が継ぎ

吾斃れなば君継ぎくくるるを

幾多の困難を克服して遂に実現にまで漕ぎつけた

黒木少佐は、基地が山口県大津島に開設され、操縦訓練に入つた翌日の昭和19年9月6日夕刻、樋口孝大尉の操縦する艇に同乗して悪天候のなかを訓練に出発した。しかし艇は途中で徳山湾の海底に突入、搜索救助が暗夜のために遅れ、詳細な報告と遺書を遺して、7日早朝二人は壮絶な殉職を遂げた。

死を決した時、武士の道を思い艇内で書き記した歌は、

男子やも我が夢ならず朽ちぬとも

留めおかまし大和魂

国思い死ぬに死なれぬ益良雄が

友々呼びつ死してゆくらん

次に史料調査会海軍文庫発行の「海軍」第六巻に掲載されている該当事項を転記する。(編者)

特殊潜航艇

開戦時真珠湾攻撃に参加した甲標的(特殊潜航艇)は、その後シドニーとマダガスカル島ディゴスワレス、ガダルカナル島ルンガ泊地の攻撃に使用されたが、甲標的一基を攻撃地点まで運搬するのに大型潜水艦一隻を使用しなければならず、その攻撃効果も挙らないことが多かった。

広島県大浦崎のP基地で甲標的要員の訓練と研究を行っていたが、研究が進むにつれ、敵泊地攻撃よりも局地防禦用に使つたほうが効果的であると考えるようになった。このためには甲標的自身に発電機を装備する必要があるが、十八年秋から新型のものの生産を開始した。最初のを甲型、試作艇を乙型、新型量産艇を丙型と呼称した。甲型は乗員一人であったが丙型は三人になった。甲標的はその後も改良が

加えられ、やがて乗員五名の丁型となつて「蛟龍」と呼ばれたが、これは昭和二十年になってからのことである。

甲標的は魚雷を発射するものであるから、決死的には使用されたが必死的なものではない。現に真珠湾攻撃に参加したときも、特に乗員の収容について種々の手配が講ぜられた。

特攻兵器の発足

昭和十八年秋、大浦崎で訓練中の甲標的員の中に黒木博司中尉がいた。同中尉は甲標的は構造が複雑で量産に適さず、攻撃力も不十分であるとし、簡単で強力なものとして必死の人間魚雷を考えだし、同室の仁科関夫少尉とともに検討をはじめた。黒木中尉は十八年末、上京して海軍中央部に血書で請願を行った。しかし軍令部の担当部員藤森少佐がこの請願を永野総長に報告すると言下に却下された。

しかし、戦局はその後加速度的に悪化したので、昭和十九年二月二十六日、呉海軍工廠魚雷実験部に黒木中尉、仁科少尉考案の人間魚雷の試作を命ずることになった。最初は魚雷命中直前に搭乗員が海中に投げ出されることを条件としていたが、これが日本海軍が組織的に特攻作戦に乗り出した最初である。



黒木博司

今期の戦史 ⑤

特攻の嚆矢

空母飛龍の飛行隊長友永丈市大尉

付・ミッドウェー海戦の概要

順序が逆になるが、本紙の主眼上17年6月5日から行われたミッドウェー海戦における飛龍の飛行隊第二次出撃の場面から先にのべる。赤城、加賀、蒼龍の三隻の空母は飛行甲板に出撃する機が並んでいて、戦えるのは飛龍だけである。飛龍には第二航空戦隊司令官の山口多聞少将が搭乗していた。

山口少将はミッドウェー島攻撃から帰つたばかりの友永飛行隊長に、電撃機十機、戦闘機六機を率い敵空母の攻撃を命じた。

草鹿龍之介（このとき南雲機動部隊参謀長）が戦後書いた「運命のミッドウェー海戦」の文面を引用すれば、

「この友永大尉が日本特攻の始まりなのである。早朝のミッドウェー攻撃にいった時、三十マイルほど手前の所で、彼の機は一弾を受けて、左翼の燃料タンクが射ち抜かれた。彼は辛うじて母艦まで辿りついたのである。そこへ再び攻撃命令が発せられた。右翼のタンクだけでは片道の燃料だけしかない。修理しようとしてもその時間はない。その飛行機を使わないと九機になってしまう。友永大尉は、「これでゆくぞ」と準備を命じた。部下はそれがすっかり判っているから、みすみす隊長を殺すわけにはゆかない。

「どうぞ、私の飛行機をお使いください」

と言ったが、彼は笑って答えない。

指揮官機には尾部に標識が付けてある。編隊がそれを目標に集結するためである。カモフラージュの色はいろいろでも、その尾部を黄色に塗り、そこに赤線を三本入れてあれば総指揮官機、二本ならば一隊の指揮官機、一本は中隊長機、黄色でなく白地に赤一本ならば小隊長機というようになっていた。

友永大尉は射抜かれた燃料タンクをそのままに、黄色に赤三本の指揮官機に乗っていった。片道攻撃覚悟である。山口司令官が、

「ゆけッ」と言った。

「ゆきます」

友永大尉はニコリと笑って、やがて機は発進していった。何も言い遣さないが、心中必死を覚悟していたのである。

それを裏書する如く、この雷撃隊に参加した一中尉が帰ってから報告したところによれば、指揮官機が弾幕を突破して魚雷を発射したのを確認した。その魚雷は水面を航走していった、ということである。そして、その指揮官機はヨークタウンの反対側に姿を現わさなかったというから、或いは体当りしたのではないかと思うが、向うの記録によると体当りをしたものはない、ということになっている。しかし、どこかにぶつかるつもりであったことは確からしい。

飛龍遂に沈む

さて機動部隊は前記の如く、更に一戦を試みるべく、飛龍を先頭に立ててこれを護る如く、敵方に進出を図り、尚存在せる其の飛行機を以て一撃を加え、引き続き敵を夜戦に引き込み、伸るか反るかの一戦を為さんと、最後の希望に突進した。

アメリカの空母からする第一次攻撃によって、こちらの三隻はとどめを刺された。しかも、その間ヨークタウンは戦闘不能となったが、艦上で一機もやられていないから、エンタープライズ、ホーネットの二艦に移されて、三艦分の航空兵力を保持している。これが第二次攻撃として、十三機をもって飛龍めがけてやって来た。時に日出後十二時間、東京時間で午後二時ごろ、ミッドウェー海面には夕闇が訪れて来た頃である。

十三機によって飛龍は四発の直撃弾を食った。近くにいた榛名、利根、筑摩も襲われたが、被害はなかった。

その少し前、飛龍では第三次攻撃をかけようかと考えていた。しかし、もはや飛行機があまり残っていない。全部を合せて戦闘機六機、急降下爆撃機五機、雷撃機四機、それだけしかなかった。十五機では無理も無理、どうすることも出来ない。仕方がないから、もう少し待って薄暮攻撃をやろうということになって待機していた。

そこへ四弾命中、赤城、加賀、蒼龍と同じく甲板に列べてあった虎の子の十五機が互いに誘爆し合い、たちまち火の海となり、ついに最後迄戦った飛龍も僚艦と運命を共にした。

そこで全員を駆逐艦に収容したが、航行不能のまま

ま、沈みもしない。翌日の明け方、涙を吞んで駆逐艦の魚雷で沈めてしまった。

総員退去が命令せられた後も、山口司令官と艦長の加来大佐だけは退去しない。

「ほかの者はみな下りる。俺は司令官として奮闘、飛龍を喪った責任上、飛龍の最後を見届ける。お前達は早く移って、また次の仕事をやれ」と山口司令官は言う。

「私が艦長として飛龍と運命を共にします。司令官はどうぞ御退艦を願います」

加来大佐が再三勧めたが、「それなら二人で死のう。ちょうど月夜だ。月でも眺めよう」と言って微笑した。

駆逐艦が飛龍のそばに横付けとなつて、二人とも移って下さいと頼んだが、

「向うへいって魚雷を発射せよ」

と言われて、やむなく離れて、魚雷一発、ついに飛龍は沈んでいった。

山口司令官・加来艦長軍艦旗と訣別



市川国雄 画 (原画は油絵)

ミッドウェイ、アリュウシャン作戦の構想 (大東亜戦争全史依る)

ハワイ作戦終了後、聯合艦隊司令部は、瀬戸内海西部柱島泊地の旗艦大和にあつて、全般作戦指導を行うと共に新作戦の準備を実施した。南方攻略作戦の一段落と、昭和十七年四月印度洋方面作戦の終了に伴い、聯合艦隊水上部隊決戦兵力を瀬戸内海西部に集結せしめ、基地航空部隊の大部を太平洋東正面に配備し、着々次期作戦の準備を進めた。

大本営は昭和十七年五月五日山本聯合艦隊司令長官に対し、陸軍と協同して、ミッドウェイ及びアリュウシャン西部要地の攻略を命令した。当時聯合艦隊司令部において計画せられていた太平洋東正面作戦、即ちミッドウェイ、アリュウシャンに対する作戦構想の概要は次の如くであつた。

一、一般方針

作戦方向はミッドウェイ島方面とアリュウシャン群島方面とに二分するが、両者を緊密に連繫せしめる一体の作戦とし、要地の攻略作戦自体も重要な作戦目的であるが、この攻略作戦を契機として反撃の為出現を予期せられる敵艦隊を捕捉撃滅することも目的とする従つて、敵が両方面の何れに集結出現した場合も、充分之に応じ得るよう有らゆる兵力配備を考慮し、聯合板隊決戦兵力を之に充て得る如くする。

二、ミッドウェイ方面の作戦

1 作戦要領

機動部隊を以て功略部隊の上陸前ミッドウェイを空襲、所在兵力及び防禦施設を壊滅し、攻略

部隊を以て同島を一挙に攻略すると共に出撃し来る敵艦隊を捕捉撃滅する。敵有力部隊がハワイ方面から反撃してくる場合は、ハワイ、ミッドウェイ間に潜水部隊を配置し、機動部隊及び主力部隊はミッドウェイの北及至北西海面に、攻略部隊は同島の南及至南西海面に待機して之を邀撃する。

2 各部隊の行動

占領隊たる第二連合特別陸戦隊(二箇大隊約二千八百名)及び陸軍一木支隊(一木清直大佐の指揮する一箇大隊基幹、約三千名)は、第二水雷戦隊及び第七戦隊護衛の下に五月二十八日夕刻サイパン出撃、六月七日上陸を執行する。

第一機動部隊は、五月二十七日早朝内海西部出撃、六月五日午前一時三十分ミッドウェイを空襲する攻略部隊主隊たる第二艦隊は、五月二十九日早朝五時内海西部出撃、途中サイパンから出撃した部隊を掩護し、上陸当日は概ねミッドウェイ島の南乃至南西に進出して上陸部隊の直接掩護を行ふ。

攻略部隊の水上機部隊は、六月六日キュア島(ミッドウェイ島西北西約十七哩)を占領して飛行基地を設置し其他の部隊は七日上陸戦闘に直接協力する。

主力部隊(第一艦隊)は、五月二十九日朝内海西部出撃、各部隊を支援しつつ上陸当時ミッドウェイ島北西六百哩に進出する。

基地航空部隊は、艦隊の行動に策心して広範囲の索敵哨戒を実施すると共に二式飛行艇二機を以て五月三十一日から六月三日の間、真珠湾の

奇襲偵察を実施する

先遣部隊（潜水部隊）の主力は、右飛行艇の行動に協力すると共に六月六日迄にハワイ、ミッドウェイ中間に散開線を構成し敵艦隊の反撃に備へる

ミッドウェイ島攻略後は、第二連合特別陸戦隊、各種砲九十四門、機銃四十挺、甲標的（註、特殊潜航艇）六、魚雷艇五を同島に配備し、六月中旬以後更に甲標的の四、発射管（四連装）二基、二十糎砲十二門の増加を予定する

二、アリューシャン方面の作戦（略）

ミッドウェイ作戦の経過

進撃開始—海軍記念日

参加各部隊は海軍記念日の五月二十七日午前六時南雲中将麾下の機動部隊の南海出撃を先頭に、相次いでミッドウェイを日指して進撃を始めた。

これら各部隊は、開戦以来約半歳に亘る大作戦により、乗員の補充交替、艦船、飛行機の整備に多忙を極め、充分なる訓練は固より本作戦に関する研究の余裕少く、聯合艦隊より示された計画をそのまま鵜呑みにして出撃するの己むない状況であった。

当時聯合艦隊の作戦兵力中ミッドウェイ作戦に直接参加したものは主力部隊、機動部隊、攻略部隊、基地航空部隊及び先遣部隊に区分されていた。

主力部隊は旗艦大和坐乗の山本聯合艦隊司令長官の直接指揮する戦艦七隻、軽巡三隻、小型空母一隻を基幹とした。

第一機動部隊は赤城（旗艦）、加賀、飛竜、蒼竜

の航空母艦四隻を基幹とし、その搭載機は艦上爆撃機八四機、艦上攻撃機九三機及び戦闘機八四機、計二六一機で、このほかミッドウェイ攻略後同地に展開予定の基地航空部隊の先発戦闘機三六機を各航空母艦に分載していた。

攻略部隊は第二艦隊司令長官近藤中将指揮下の戦艦二隻、重巡八隻、軽巡二隻、小型空母一隻、水上機母艦二隻を基幹とし、これに上陸作戦兵力たる一木支隊の約三〇〇名及び第二連合特別陸戦隊約二八〇〇名を搭載した輸送船一二隻を随伴した。

基地航空部隊中ミッドウェイ作戦に協力すべき第二十四航空戦隊は、陸上攻撃機、戦闘機各七二機及び飛行艇一六機を以て南洋諸島に展開していた。

又先遣部隊の潜水艦計一五隻は六月六日ハワイ、ミッドウェイ間の散開線についていたが、進出途中海面の掃航索敵が錯誤によって行われなかつたため、敵機動部隊はこの配備完了時には既に同海面を通過してしまつた後で、後に戦局に重大な影響を与えることになつた。

戦機動くも敵情不明

敵情は判然としないまま各部隊は刻々とミッドウェイへと近接した。三十日には敵潜水艦らしい電波が長文の緊急電報を発信していたが、その潜水艦の位置からして我が輸送船団を発見報告した疑いは多分にあつた。果然六月四日朝六時この船団がミッドウェイ島の南西六〇〇哩附近に達した時、敵の偵察機に発見され、次いで同日午後以降敵の陸上機から攻撃を受けることになつた。

一方機動部隊は六月一日、二日に補給を実施した

後、満を持して東方に進撃中、海上の視界漸時不良となり次いで濃霧の来襲を見るに至つて一切の視覚信号は全く不能となつた。適々三日午前十時三十分にはミッドウェイ島に向けて針路変更を行わねば予定日の作戦に間に合わないという事態になつたので、己むを得ず無線封止な破つて変針命令を長波で発信した。既に電波が出た以上、機動部隊の所在は敵に曝露したものと思わねばならない。かくて二十四節の高速で北西からミッドウェイに近迫する機動部隊は緊張の極にあつた。

四日午後三時十分敵哨戒機らしい電波を我が機動部隊の至近に感じ、続いて午後四時四十分掩護部隊の利根から二百六十度方向に敵機約一〇機発見の報告があり、又午後十一時三十分雲間に隠顕する触接機らしい燈光を二回認め、直ちに戦闘配置についていたが何れも確認に至らず、恐らくは誤認によるものと判定された。この頃の南雲中将の情況判断では、わが機動部隊は未だ敵に発見されていないと認める。敵艦隊は攻略作戦が進捗せば出動反撃してくる算がある。我としては先ずミッドウェイ島を空襲し、敵の基地航空兵力を潰滅し上陸作戦に協力した後、敵機動部隊が若し反撃して来たならば、これを撃滅することが可能であるという考えであつた。

ミッドウェイ空襲—運命の兵装転換

予定に従つて、五日午前一時三十分ミッドウェイ空襲の第一次攻撃隊は飛竜の飛行隊長友永大尉指揮の下に、戦闘機三六機、爆撃機三六機、攻撃機三六機の編隊を以て発艦し、攻撃に向つた。この攻撃隊は発進後間もなく敵飛行艇の追躡触接を受け、目指

すミッドウェイの二〇湊附近に近づくやこの飛行艇は我が攻撃隊上空に吊光弾を投下して米戦闘機の誘導に当った。これに引続き彼我戦闘機の間にも猛烈な空中戦を展開し、美事に敵機を圧倒した後日標上空に進入したが、地上に敵機を見なかつたので飛行場その他軍事施設を爆破して帰途についた。

ミッドウェイ飛行場の敵機は、わが攻撃隊の近接通報によつて避退や反撃のため飛び立つていたので、攻撃成果不十分と認められた友永隊長は、午前四時「ミッドウェイに対し第二次攻撃の要あり」との意見を電報した。

当日の早朝、機動部隊の南方及び東方海面に対する敵機は、午前一時三十分から二時の間に発進したので、四時十五分に右意見具申電報が南雲中将の手に達した時には、未だ敵艦隊に関する何等の報告もなかつた。そこで敵の水上艦艇の出現に備えて待機中の第二次攻撃隊をミッドウェイ島に指向するに決し、同攻撃隊艦上攻撃機の兵装を魚雷から八〇〇匁の陸用爆弾に転換を下令した。

敵の先制第一撃―敵艦隊判明

これより先午前二時三十五分頃から敵の触接機は機動部隊の周辺に隠現していたが、四時頃に至つて敵陸上機の来襲が始まり、六時五十分頃まで殆ど連続的に執拗な攻撃が反復された。この間六時二十分頃からは敵艦載機の雷撃を受けたが、我が戦闘機及び防禦砲火を以て猛反撃を加え、殆ど大部の敵の来襲機を撃墜し、六時五十分過ぎには全く敵の機影なく、機動部隊は何等の損傷をも蒙つていなかった。

この陸上機の来襲中、五時頃になつて初めて敵艦

発見の第一電が入つた。それは四時二十八分利根の索敵機の発信で、「敵らしきもの十隻見ゆ、ミッドウェイよりの方位十度、二百四十湊、針路百五十度、速度二十節」であつた。引続いて附近天候や敵針敵速の報告が二回来たが、肝心の兵力内容については判明しなかつた。そこで直ちに「艦種知らせ」を指令したところ、利根機から五時九分に「敵兵力は巡洋艦五隻、駆逐艦五隻」と報じて来たが、五時三十分に至り「敵は其の後方に空母らしきもの一隻を伴ふ」ことを明かにした。かくして敵航空母艦の存在が確実になつたので、南雲中将は聯合艦隊司令長官に状況を報告すると共に、この敵に向わんとする意図を明かにした。

しかし、この攻撃に指向すべき第二次攻撃隊の艦隊は魚雷から陸用爆弾へと兵装の転換中で速急な発進が不能であり、即時使用可能なものは艦爆隊のみであつたが、掩護に任ずべき戦闘機は来襲敵機撃攘のため在空中であつた。偶々掃投中の第一次攻撃隊は六時頃から母艦上空に姿を現わし始めたので、この収容を終つてから攻撃隊を発進することに決した。この頃第一航空戦隊（赤城、加賀）は七時三十分、第二航空戦隊（飛竜、蒼竜）は七時三十分乃至八時の間にそれぞれ発進可能な報告が来ていた。

一瞬遅し―大勢決す

かくて第一次攻撃隊の収容を終り、第二次攻撃隊が発進準備も殆ど完成し、既に「準備出来次第発進」の艦隊命令も下り、その第一機が飛び出さんとする瞬間、七時三十五分敵の艦上爆撃機約三〇機が突如として急降下爆撃を加えて来た。各母艦の甲板上は

発艦前の飛行機で埋まり防禦には最悪の状態であつた。命中弾は多数の誘爆を起し、旗艦赤城を始め加賀、蒼竜の三艦共に火災を免して何れも落伍の己むなきに至つた。残る航空母艦は僅かに飛竜一隻となり戦局の大勢は瞬時にして決してしまつた。損傷艦は何れも通信さえも出来ず、火災も当分鎮火の見込みもないので、機動部隊指揮官は附近で警戒中の巡洋艦長良に移乗して作戦指揮を執るに決し、八時三十分将旗を同艦に掲げた。残存の飛竜を中心とする機動部隊は一路北方へ走りながら戦闘継続中であつたので、長良もその路を迫つて合同を計つた。

飛竜独力奮戦―最後壮烈

飛竜に坐乗中の第二航空戦隊司令官山口多聞少将は孤軍ながら敵機動部隊の攻撃を決意し、七時五十分戦闘機六機、爆撃機一八機を発進させた。この攻撃隊は熾烈な敵戦闘機及び防禦砲火の妨害を排除して九時七分エンタープライズ型敵空母に直撃弾を与え、これを大破せしめた。

あつた

これより先午前五時三十分蒼竜を発進した触接機の飛竜帰還後の報告により、既報のエンタープライズ型のほかにその北方に別にエンタープライズ型及びホーネット型空母を基幹とする機動部隊の存在が明かにされた。よつて飛竜の残存全飛行機を以てこれが攻撃を行うことに決し、友永大尉指揮の攻撃機一〇機は戦闘機六機の掩護下に午前十時三十分発進した。本攻撃の成果は敵空母一隻に魚雷三本を命中せしめ、別に大巡一隻を大破したと報ぜられた。

(註) 戦後の調査ではヨークタウンに魚雷二本を命中させたのが実相である。

以上、三次に亘る攻撃によつて飛竜は攻撃兵力の大部を失い、僅かに戦闘機六機、爆撃機五機、攻撃機四機を残すのみであったが、飽くまで敵の残存空母の撃滅を企図して薄暮の攻撃を準備した。しかしこの攻撃隊が正に発進しようとした午後二時三分に敵の爆撃機一三機の爆撃を受け、唯一の生残り飛竜もまた遂に大火災を起し、今や航空母艦は全滅の悲運に陥つた。第二航空戦隊司令官山口少将及び飛竜艦長加来大佐は総員を退去せしめた後、飛龍艦橋において従容として自決し、艦と運命を共にした。

退避行動と聯合艦隊

突嗟の間に惨敗を喫した南雲中将は、徒らに敵の航空攻撃を蒙らんよりは一旦西方に避退した後夜暗に入るを待つて反転近迫して夜戦を行うことを企図した。午後二時頃の状況では戦果の判定から推定して敵には尙少くとも一隻以上の母艦健在と判断していたが、午後三時半筑摩機から傾斜火災中の敵空母の東方に敵空母四隻、巡洋艦六隻及び駆逐艦一五隻西航中の報に接した。かくて敵兵力がなお予想外に大なるを知ると共に日没時の飛行接触も見込みない状況となつたため、夜戦を企図するも成算に乏しく、且つ翌天明時以後の離脱更に困難を加えることを予想して夜戦の企図を抛棄し、北西方へと避退を続行することになつた。

一方、聯合艦隊旗艦では朝来の敵情に鑑み全力を以て当面の敵艦隊を撃滅するに決し、午前九時二十分北方アーリューシャン方面に行動中の第二機動部隊

(電驥隼鷹に合同を命じ、次いで戦況上午前十時十分にはミッドウェイ島及びアーリューシャン群島攻略の一時延期を令した。その後一旦は夜戦を決意したが、戦況は時と共に不利に展開しつつあるを看取した山本長官は、午後九時十五分攻略部隊及び機動部隊に対し主力部隊に合同を命じ、更に午後十一時五十五分にはミッドウェイ島攻略の中止を命じた。

機動部隊は、六月六日午前中なお敵機の攻撃を受けながら辛くも危機を脱し、同日午後には主力部隊及び攻略部隊の大部に合同した。聯合艦隊長官は大勢既に決したものと認め、先に招致を発令した第二機動部隊を北方部隊に復帰させ予定のアーリューシャン要地攻略を再興させることにし、午前七時これを発令した。

惨敗——不幸の連続

これより先き六月五日、決戦海面に進出中、午前十時十分の聯合艦隊命令によつてミッドウェイ島砲撃を命ぜられた栗田少将麾下の第七戦隊の重巡洋艦四隻は全速力で同島に近接し、六日未明に艦砲射撃を決定せんとして突進していた。同隊がミッドウェイ島の西方九〇哩に達した時に、前記午後九時十五分の聯合艦隊命令によつて砲撃を取止めて合同を命ぜられたので、針路を反転した。その直後先頭の旗艦熊野は敵浮上潜水艦を発見したので緊急回避信号と共に転舵したところ、この信号の通達が不徹底で三番艦三隈は四番艦最上と衝突し、最上の前部は切断して航行困難の状況となつた。その後三隈は最上を護衛して西方に避退中、六月七日午前六時四十五分以後、ミッドウェイ島の西方約五〇〇哩において

敵艦上機の連続攻撃を受け三隈は遂に沈没した。これによつて敵機動部隊の追撃を知つた山本長官は、この敵を我がウェーキ島基地航空圏内に誘致して反撃せんことを企図し七日正午この命令を発した。しかし敵艦隊はその手に乗らず、その後東方へ離脱してしまつた。

かくしてミッドウェイ海戦は日本側の惨敗を以て終りを告げた。日本海軍は航空母艦四隻その搭載機と共に失い、巡洋艦三隈を犠牲にしたのに対し、米側は航空母艦ヨークタウンが我が飛行機の雷爆撃によつて大破後我が伊号第一六八潜水艦に止めを刺され沈没したのと、これと運命を共にした駆逐艦ハムマンを喪つたに過ぎなかつた。

ミッドウェイ攻略部隊の第二聯合特別陸戦隊及び一木支隊は、攻略中止に伴い六月十三日午後グウム島に到着し、一木支隊は大本営直轄となつて同島に集結して、訓練を行うこととなつた。



敵機の攻撃を受け炎上する赤城 (右) 左は駆逐艦

米空母に突入した俊助兄のこと

(弟) 富安 秀雄

兄は大正十一年生まれ、昭和18年秋、十三期予備学生として土浦航空隊に入り、昭和20年5月14日、九州南方海域で、米機動部隊に特攻攻撃を行った。第六筑波攻撃隊(11機)の隊長であった。兄の戦死の状況は長い間不明であったが、菅原元氏の盡力で昨年判明した。米軍の記録によると、兄は米空母エ

板前方昇降床に突入。兄と機体は2層程下に残り、爆弾は最下層に達して船

体や、飛行甲板を大破。空母は沈まなかつたが、その被害の為退陣した。米軍の記録では、「パイロット(兄のこと)は、エンタープライズを戦争から叩き出したのだ」とある。

兄は目が大きく、明るい性格で、早大専門部卒、運動や音楽好きで、よくハーモニカを吹いていた。

本件については菅原元氏の投稿文があり、更に詳細に記述されているが、紙面の都合で次号に掲載する。

叙勲は特攻隊員のお蔭

単光瑞宝賞の筒井英治さん(鹿児島子科練12期出身)遺族と靖国神社に報告

理事 広島 文武

それから旬日を出でずして、感謝の会が盛大に開催され、再びご招待をいただいたのであります。当日は、北朝鮮の拉

平成15年秋、単光瑞宝賞をめたく受章された筒井英治さんは、危険業務に従事者としてこの荣誉に浴されたのであります。受章直後かつて鹿児島海軍航空隊甲種予科練習生12期の遺族とともに、靖国神社に昇殿参拝して、この

栄光は、俺一人のものでない……と報告されたのであります。当日 司期の桜の遺族は、

菊水1号作戦第210部隊彗星隊 第二四分

二飛曹 宮尾三十一 30年4月11日

菊水5号作戦第7神雷攻撃隊 鹿屋

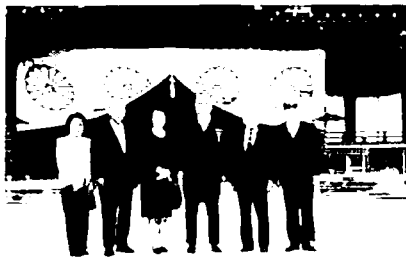
一飛曹 野崎 徹 30年5月4日

本土米機動部隊攻撃第4御橋隊 百里原

一飛曹 広島 忠夫 30年8月9日

の弟・妹でありました。

今日の平和な日本に過せるのも、あの大東亜戦争の末期、海軍唯一の戦法史上最初にしての最後の「特攻隊員として、祖国を信じ後に続く者を信じ、愛機諸共敵艦隊(沖繩・金華山沖)に突入散華した貴様と俺であり、ただ感謝あるのみと報告し、遺族にも述べられたのであります。



昭和15年11月13日 昇殿参拝後

遺族 広島文武

難うございました。

- 12期 久保山さん
- 広島 文武
- 筒井さんご夫妻
- 12期 桐尾さん
- 遺族野崎さん家妹
- 古谷さん

靖国神社のご祭神について憶うこと

して戴くよう連絡する。

深井 正昭

「兵長」のままの2名は飛行第66

関わりは一切ありません。」と言う冷やかな文面である。

戦後における無責任の調査報告等によるものか、神社側の転記の誤りか、その両方か分らないが、大勢のご祭神に誤りがあると考えられ、尚かつ未合祀のご英霊も可成りおられるのではないかと危惧される。

靖国神社遊就館は増改築されて平成14年7月13日面目を一新してオープンした。ご祭神のご遺影展示室も新設されている。戦没同期たちのご遺影も掲額が可能であるとの情報を得たので、昨秋の戦友会総会で協議して、若くして日本国のために散った同期11名と助教3名のご遺影を展示すべく、ご遺影のご承諾ご了承も戴き、ご遺影の収集も終えて、戦没者氏名、階級、戦没年月日、戦没地、出身県及び現在のご遺族住所、氏名等を写真の裏面に記載して、去る2月21日に我が戦友会抛出の浄財を添えて遊就館に持参して、その手続きを無事終了した。

戦隊に所属し、昭和20年5月4日と同日に南西諸島方面洋上で戦死された同期である。二人の本籍地は新潟県と富山県であり、早速両県の担当課に事情説明の手紙に諸資料(軍歴の概要・陸軍特別幹部候補生制度創設の勅令コピー)を同封して照会したが、結果は両県ともに当時の書類が無くて、「陸軍兵長で認定」になっているので「伍長」として昇格の確認はできません。ただし、新潟県からは「厚生労働省へ軍歴と最終階級のわかる資料提供依頼を行って回答待ち。」と附記があった。更に「回答は厚生労働省の事務煩瑣のため半年後になる予定。」とその後の追伸である。

その後両県と、二、三度の手紙・文書の交換があつて、厚生労働省で諸資料調査の結果、当時の部隊名簿が発見されたとかで六月中旬になって漸く「伍長」認定の通知を受けることができて安堵したが、戦没同期11名中4名が階級、戦没年月日や名前の各項で間違つて登載されとすることに不信と疑念が湧いてくる。

戦後における無責任の調査報告等によるものか、神社側の転記の誤りか、その両方か分らないが、大勢のご祭神に誤りがあると考えられ、尚かつ未合祀のご英霊も可成りおられるのではないかと危惧される。

数日経過して、遊就館担当者より戦没同期ご祭神のうち2名が生存時の「陸軍兵長」の階級のまま合祀されていると言う電話連絡であり、「陸軍伍長」に進級させるのには公式文書が必要とのことである。

富山県担当課からの回答には、「当県を含め、全国の都道府県では、戦没者の兵籍簿は一切保管しておりません。(生存者のみ保管)。ご存じとは思いますが、靖国神社への合祀については、かつて、遺族会がまとめて手続きをとったと聞いており、県は一切関わっておりません。いずれにしても、県では、政教分離の原則により、靖国神社との

戦後における無責任の調査報告等によるものか、神社側の転記の誤りか、その両方か分らないが、大勢のご祭神に誤りがあると考えられ、尚かつ未合祀のご英霊も可成りおられるのではないかと危惧される。

このほか、戦没年月日が違っている同期が1名、名前が違っている同期が1名いるとのことで、早速ご遺族に電話し、本籍地より戸籍謄本の交付を受け、靖国神社に送付して誤記載を修正

調査結果が送付になった。B5判の用紙に一名づつ氏名、階級、所属部隊、死没年月日、死没場所、死没時本籍地、死没時ご遺族氏名・続柄、合祀年月日等が克明に記載されているが、子細に見ると各項目で間違いが目立つ。更に79名の内7名の戦没者については「神社の資料に見当たらず該当者なし」の添え書きである。早速にも合祀の手続きをされるようご遺族に連絡をしたが、7名も未合祀のご英霊とは驚きであり、矢張り心配していたとおりの結果である。



遊就館展示の遺影

平成15年11月30日記

ハンガリー日本博物館について

このことに就いては昨年11月に出した会報57号で説明した。創設者から日本の特攻作戦について資料を求められたので、7点の写真とその解説を送ったことも既に述べた。その後下記の一文と、ハンガリー国大統領が訪問した写真が送られたので紹介する。

ハンガリー日本博物館概要

所在地 ハンガリー ベーケーシュ県 フュゼシュジャルマト市 コシュート通り 10番地

Fuzesgyarmat, Kossuth u.10. Hungary

Tel/Fax (36)66-491-150

創 立 1980年

創立者 スティーブン・ドマ・ミコー 国際平和功労賞受賞
フュゼシュジャルマト名誉市民

これまで数回転居したうち、1998年現在の地にいたる。

建物面積 323平方メートル

敷地総面積 323平方メートル

2000年夏 1200平方メートル (364坪) 日本庭園造園

庭園設備 鹿おどし、竹垣、池、水禽窟ほか

現代美術画廊

常設展として日本の自然、歴史、民族の紹介、1800点に及ぶ。

弥生時代、平安時代、江戸時代、明治時代、昭和初期にわたり幅広い展示物を常設。

展示されている資料は武器類、甲冑、古銭、刀剣などが多く、近代日本の歴史の貴重な資料も含まれる。特に戦時中の特攻攻撃に関する資料は海外ではここ以外にない。また、広島・長崎の被爆品も展示されている。長崎の溶けた瓦やガラスなどの被爆資料も海外ではここだけである。

民芸品では生活用品、節句用具、(茶道、杯) 式典用具、着物、楽器、工芸品など。

遺 品：徳川家、黒澤明、三船敏郎、夏目漱石

記念品：元今上天皇侍従使用品

当館の目的は、日本の歴史と文化紹介、特別大和魂、武士道、日本ハンガリー両国の理解と親善を深めるため。

入館料 なし 創立者の私費にて運営
政府要人の訪問も多く、ハンガリー大統領も訪れている。



大統領 グンツ・アルバード氏

収支計算書

(平成15年1月1日から平成15年12月31日まで)

(第11年度)

(単位:円)

科目	予算額	決算額	差額	備考
1 収入の部				
1 奉仕費	6,000,000	5,891,000	-891,000	注1
2 基本財産運用収入	4,100,000	4,209,297	109,297	
3 神札金収入	4,000,000	3,145,800	-854,200	
4 寄付金収入	1,500,000	882,000	-618,000	
5 寄付金2収入	0	4,273,000	4,273,000	注2
6 懸賞金収入	1,400,000	1,145,000	-255,000	
7 出稼事業収入	700,000	660,900	-39,100	
8 雑収入	200,000	103,644	-96,356	
収入合計(A)	17,900,000	17,301,641	-598,359	
収支繰越仮当座	21,360,000	21,302,589	-57,411	
収入合計(B)	39,260,000	38,604,230	-655,770	
2 支出の部				
1 管理費				
人件費	5,940,000	6,097,700	157,700	
事業交通費	200,000	219,470	19,470	
通信費	150,000	125,191	-24,809	
会議費	400,000	211,624	-188,376	
事務委託費	810,000	801,500	-8,500	
消耗品費	500,000	435,471	-64,529	
租税公課	70,000	76,000	6,000	
予備費	150,000	0	-150,000	
2 事業費				
聖徳寺奉仕費	5,500,000	5,388,968	-111,032	注3
聖徳寺運営費	100,000	0	-100,000	
聖徳寺修繕費	100,000	66,251	-33,749	
出稼事業費	1,600,000	2,125,783	525,783	
出稼用車費	3,500,000	3,506,763	6,763	
予備費	400,000	0	-400,000	
支出合計(C)	19,420,000	22,159,229	2,739,229	
繰越収支差額(A)-(C)	-1,520,000	-557,588	-392,412	
収支繰越収支差額(B)-(C)	19,840,000	20,445,001	605,001	

注1 会員増強に努めた結果約400名の新たな会員であった。
 注2 神次郎さまご三郎さまのための会員増強実行委員会が主催したため。
 注3 寄付金の金額と額を調整する必要があるため。

平成15年度事業報告

1. 報告事項

- (1) 第24回神攻隊合祀祭
 - 平成15年4月4日南宮神社において、第24回合祀祭を挙げて、参列者は、神攻37名、遺族5名、会員等213名合計305名であった。式典終了後私学合宿に於いて、当協会の年次総会を開催し、平成14年度事業並びに収支決算報告が行われた。
- (2) 第52回神攻隊奉仕報告年次総会
 - 平成15年9月23日豊田山崎宮寺に於いて、両寺主の年次報告がなされた。参列者は神攻37名、遺族5名、会員等256名合計348名であった。
- (3) 全国各地祭礼への参賀
 - 4月6日 飯沼神社御祭 (香取県香取市参列) 宮崎・飯沼市
 - 4月12日 豊谷町神宮御祭 () 自衛隊豊谷基地
 - 5月3日 加賀神宮御祭 () 鹿沼市・七賢町
 - 5月25日 万生神宮御祭 () 鹿沼市・加賀町
 - 6月7日 鹿沼空堀御祭 (供花料送付) 鹿沼市・東文仁
 - 9月21日 原ノ町飛行場御祭 () 福島・原ノ町
 - 10月5日 水戸つばさの郷御祭 () 茨城・水戸市
 - 10月10日 神徳御祭 (鹿川町参列) 京都府
 - 10月12日 少嶋合宿御祭 (香取県参列) 南宮神社
 - 10月17日 千鳥合宿御祭 () 千鳥が神社
 - 10月17日 別荘地御祭 (供花料送付) 三重・徳島御祭地
 - 10月22日 神宮上野御祭 (皆本御祭員参加) 広島・江田島
 - 11月9日 四谷御祭 () 山口・周南市 (大津島)
 - 11月16日 若潮合宿御祭 (供花料送付) 南宮神社
 - 11月23日 若潮合宿御祭 (皆本御祭員参加) 香川・小豆島

2. その他の事項

- (1) 機関紙「神攻」34号、55号、56号、57号を発行して会員その他に配布した。
 - (2) 神次郎さまご三郎さまのための会員増強実行委員会を設立した。
 - (3) 年度半ばから会員増強に積極的に取り組む。南宮神社・遊藝館・加賀神宮と合祀、万生寺和祈念館、豊田山崎宮寺に入会の手配をした。
- イ、旧軍関係で未加入者に入会案内を行った。
 以上の結果本年度入会者は402名に達した。併しながら死亡及び退会者も309名に達し、会員数は純増92名(平成15年度未加入2,553名)であった。

以上

お知らせ

一、監事岡田輝彦氏は、本年1月27日、評議員小川 武氏は、3月28日に逝去されました。ご冥福を祈り上げます。

一、昨年12月10日開催の評議員会で、小松利光監事の退任と伊集院雅英氏の新任、本年3月12日の評議員会で、志賀昭夫氏の監事新任が議決されました。

一、本年3月5日開催の理事会で、欠員2名の評議員に、深山敏明、水町博勝、両氏が選任されました。

お詫び
 去る3月30日、靖国神社での特攻隊合同慰霊祭が終り、私学会館で開催されました。事務局の不手際を深くお詫び申し上げます。

特攻平和観音堂改修費
 寄進者芳名録(敬称略) 追加 平成十六年一月五日〜三月三十一日
 寄進累計額四百三十四萬円 寄進者数一千七十九名
 (北海道) 土佐林 厳 (東京) 小林 博子 (神奈川) 小林 勇
 (神奈川) 遠藤 善雄 (富山) 塚本 一郎 (石川) 永山 純夫
 (兵庫) 丸山 義郎 (広島) 仁井 彰造 (福岡) 川井美保子

会員倍増計画

協会の目的を達成する為には、会員を増加することが絶対的要件であります。目下協会としては各種友好組織を通じ会員獲得に努力していますが、現会員の皆さんの御協力を御願いたします。一人が一人の新会員を獲得すれば、たちまち会員は倍になります。

現在会員数は約三千名ですが、高齢化が進みこのままでおれば会勢衰退は必然であります。若い会員獲得に努めねばなりません。会の説明資料御入用の方はお申越し下さい。送ります。